私家版

葉山ユタ

上巻

日曜装幀家

僕は趣味で本の装幀をしている。
単なる表紙のデザインではなく、自分で本文を綴じ、遊び紙や表紙の素材を選び、タイトルを入れて本文と表紙などを組み合わせ、場合によっては函や帙も自作するのだ。ヨーロッパでは、こういった仕事をルリユールと呼ぶが、要するに自分で本を一冊丸ごとデザインして創り上げる職人仕事だ。

始めたきっかけは、元から「本」そのものが好きだったのと、好きな詩人の本を自分の手で一冊創り上げてみたいという思いからだった。最初は専門書やネットなどで記事を読み漁って我流でやってみたが、どうしても分からない部分があるのと、革表紙などの凝ったものに関しては、やはり専門家の指導がないと手の出しようが無いと分かり、少し遠かったが、工房を開いている方の教室へ一年ほど通って一通りの技術を習得した。今でも、技術面で分からない事があれば訪ねて教えを乞うが、デザイン自体は自分の好きなようにやっている。

師匠には、本気でプロになりたいのなら、是非ヨーロッパの学校に行って本場の技と歴史を学んで来いと言われるのだが、今の会社を辞めて留学し、その後この技術だけで食べて行くのは、このご時世に心もとない為、いつも苦笑いで答えている次第だ。
会社から帰宅して寝るまでの時間と、休みの日に作業をするので、どうしても一冊の本を仕上げるのに時間がかかる。傷んだ文庫本の表紙を取り替えるくらいなら半日で終わるが、本文の入力から始めるとなると、場合によっては数ヶ月かかる事も有る。

何とも根の詰まる作業だし体も疲れるが、この地道な本造りに集中している時間は僕にとって、正に至福の時間なのだ。そして、漸く一冊の本が出来上がった時、僕はその本を様々な方向から眺め、表紙や裏表紙をさすり、中を開いて遊び紙の妙を確認して、ゆっくりと本文を楽しむ。出来上がった本を書棚に並べ達成感に浸った後は、次はもっと凝った本を作ってやろうと気持ちが高揚してくる。
そんな事を繰り返している内に五年が経ち、僕の書棚の自作本も、それなりに美しいコレクションを形作っていた。

さて、本を作るとなると、まずは誰のどの作品を本にするか決めるわけだが、最初は版権切れした作家の作品を自分なりに編集してみたり、自分で撮りためた写真に、ちょっとした文章を添えて写真集を作ったりしていた。自分で詩や小説を書ければ良いのだが、残念ながら自分には文才が無い事を知っているので、どうしても本の中身は、故人となって久しい詩人や小説家のものが多くなってしまう。
勿論、販売目的ではないので、版権所有者の存在する本を作って自分で楽しむ分には問題無いのだが、万が一他人に見せて、その点を指摘されたら面倒だと思い、暇があると青空文庫などをチェックして、本にするのに魅力的な作品を物色していた。しかし、それにも段々飽きてきて、僕はネット上にいくらでも存在するアマチュア作家の小説や詩を読み漁るようになった。

いっそ、誰もまだ知らない作家の作品を、この手で本に仕立てる方が自由度が高く面白いのではないかと考え、自分の心の琴線に触れる作品を探していたのだ。しかし、アマチュア作家は玉石混交、と言いたいところだが、圧倒的に「石」の方が多い。いや、残念ながらそのほとんどが石だろう。本当に才能が有るな

ら、何らかの形で世に出るはずだ。
文芸系の同人誌でネットに公開されているものも有り、その中には才能の閃きを感じられる人もいたが、僕が本にしたいと思うような、心惹かれる作品にはなかなか出会うことがなかった。

ブログや無料公開されている電子書籍を次から次に読むのにも疲れ、僕は気分転換に自分の作った本を紹介するブログを作る事にした。あまり文章を入れるつもりはなかったので、装幀した本の画像とタイトルだけを入れてアップロードした簡単なものだ。自分の作品の紹介と言うより、自分の為の備忘録程度のものでしかなかったが、不思議とアクセス数は増え続け、時折感想や質問などのコメントやメッセージも貰うようになった。
　中には僕に装幀を教えて欲しいと言ってくる人もいたけれど、時間的に無理なので、そういったお話はお断りしていたのだが、ある日自分の作品を装幀して欲しいと言う問い合わせのメッセージが届いた。

その人は自作の短編小説に、やはり自作の銅版画の挿絵を添えて作品を作っている女性だった。一度だけ自分の本を作った事があるそうで、自費出版で限定百部印刷したものの、その出来栄えにはいささか不満があり、一冊で良いから自分の気に入る装幀で自作の版画を飾り、手元に置いておきたいと言う事だった。

メッセージに添えられたブログにアクセスしてみると、彼女の小説と銅版画が、何の飾り気もなくただ淡々と表示されていた。それは若干少女趣味ではあるが、耽美的で少しばかり性的なニュアンスのある作品で、僕はどちらかと言うと、その人の文章よりも挿絵に使われた銅版画の方に強い興味を引かれたのだ。彼女の作品を見るまでは、自分の為の本を作る事にしか興味無かったが、ブログに掲載された文章と銅版画の画像を何度も繰り返し見ていくうち、僕はこの作家と作品にぴったり合った、美しい本の装幀をしてみたいと思うようになった。

メールを貰って数日後、やっと僕は彼女のメールに返事を書いた。長々とメールを書くのは苦手なので、彼女の作品が気に入ったという事を伝え、装幀を引き受けられるかどうかはまだ分からないが、もし良ければ自費出版した本を見せて欲しいと言う事と、どんな本の装幀を希望しているかをだけ聞いてみたのだ。あまりにも豪華な装幀を希望しているのなら、残念ながら僕の手には余るので、その時には師匠を紹介しようかとも考えていた。メールを送った翌日、彼女から早速メールが届いた。

自分の作品を気に入ってくれて嬉しい、本はまだ手元に数冊残っているので住所を教えてくれれば一冊送ると書かれていた。また、装幀のデザインについては、素人なので上手く伝えられないが、銅版画のイメージ世界に合った美しいもので、革で装幀したい。もし引き受けて貰えるなら、その際に細かく相談したい、とも書かれていた。今度は僕もその日のうちに返事を送り、彼女に僕の住所と連絡先を伝えた。

彼女の名前は生方真麻（うぶかたまあさ）と言って、これはペンネームではなく本名だそうだ。僕は三十代の半ばを過ぎ、これと言って付き合う女性もいない状態が長かったので、正直この出会いに小さな期待を持ったのは事実だ。しかし、彼女から近日中に本を送ると言う返事が来た時、その小さな期待は、ふわりと淡く消えてしまった。少しだけ書かれていた自己紹介によると、家事の合間を縫って作品を作っている彼女は二十六歳になる若い人妻だったのだ。

本の装幀をするのに作家の顔や生活は知らなくても良いと思っていたが、知ってしまうと、またそれはそれで作品に一つの印象とニュアンスを与える。僕は、若い人妻の描く作品世界に合ったイメージを探して、書店の美術書コーナーで本を物色し、若い女性が好みそうな輸入物を取り揃えた雑貨店や服屋などをこそこそと覗き見るようになった。

程なくして、彼女から届いた本は意外と小さく、新書ほどの大きさで五十ページ程度の薄い本だった。装幀は当然さほど凝ったものでは無く、簡単にカラー印刷のカバーでくるんだだけで、中身の表紙も簡易な作りだった。しかし、僅かにクリームがかった紙に印刷された銅版画と文章は、ネットに公開されているもの以上に甘美でエロティックだった。

本のタイトルは「海の底の蝶の夢」と言い、物語の内容は、小説と言うよりは大人の童話と言った印象だった。もしかすると銅版画のイメージが先行し、それに文章を付けていったのかもしれない、と僕は感じた。物語を簡単に要約すると、あまり可愛らしくもない平凡な女の子が、成長するにつれ人の目を惹きつける

ような美少女になり、遂には美しい成熟した女性に成長するが、その美しさの絶頂の頃に命を絶つ、という内容だ。

これではまるで陳腐な少女小説に思えるかもしれないが、情景や心理描写は甘美ながらも毒が有り、また添えられた銅版画のシンプルな描線は、少女から女に変わる主人公の体の線もあらわで、思わずその線を指でなぞりたくなるほど妖艶だった。

巻末の奥付を見ると二年前の出版で、作者が二十四歳の頃の作品だった。僕は美術や銅版画に詳しくはないが、これほどの才能のある人が、僅か百部の自費出版でしか自分の作品を世に送り出せなかった事を、残念に思った。

生方さんに送ってもらった本の感想と、この本をバラして表紙を作り替えるだけなら割合簡単に出来る事と、その際は材料費の実費だけ貰えればいいので是非やらせて頂きたい、という趣旨のメールを送ったところ、翌日には彼女から返事が届いた。それはちょっと意外な提案だった。

篠田様
私の本を気に入って頂きありがとうございます。装幀の件ですが、実は私はその本を、中身からもう一度作り直したいと考えておりました。
何と言っても二年以上前の作品ですので、今改めて見てみると気に入らない点も多く、文章も直したい部分があるのです。

そして、今回は一冊だけ篠田様に装幀して頂きたいと考えております。勿論、お支払いに関しましては実費ではなく、それ相応の報酬をお支払いするつもりです。
ところで私は、本の構造や装幀に関しましては素人ですので、篠田様のご迷惑でなければ、本の中身を作る前に一度お会いして色々ご相談に乗って頂ければ有り難いのですがいかがでしょうか？
　私も篠田様と同じ市に住んでおりますので、篠田様のご都合に合わせられると思います。図々しいお願いとは存じますが、宜しくご検討お願い致します。
生方真麻

＊

私が篠田さんに装幀をお願いしたいというメールを送ったのは、最初はちょっとした思いつきだった。以前に作った自費出版の本は、薄っぺらい新書程度の作りで、自作の銅版画を人様に見て貰うにはお粗末な代物だった。その当時は予算も乏しく、相談した印刷会社のデザイナーはパソコンや画像処理には詳しかったが、本や装幀方法についての知識はあまり豊富ではなかったように思う。

たまたまネットサーフィンをしている時に見かけた篠田さんのブログで、初めて一冊でも美しい装幀の本を作れる事を知り、もう一度自分の本を作りたいという思いが静かに湧いて来た。出来ることなら、今度は自分の為に、人に見せる為ではなく、自分が満足する為に一冊の美しい本を作りたい。私は他にも本の装幀を個人で行っている人のサイトを探し、片っ端から読んでみたが、結局また篠田さんのブログに戻ってしまった。プロでもないのに篠田さんの作る本は優しく美しく、彼らしいまとまりがあったのだ。そして、アップされた画像に少しだけ写っていた篠田さんの細い指先を見て、きっとこの人は真面目で良い人なのだと感じた。

取りあえず相談のメールを送ってみよう。断られたらその時点で諦めてもいい。その程度の気持でメールを送ったのだ。数日返事が無かったので、これは無視されたのかなと思い出した頃返事が届いた。内容を読んで私は一人微笑んだ。やっぱりこの人は真面目で良い人なのだ。誠実な返事を書く為に、こんなにも時間をかけたのだろう。その後、一二度メールのやりとりをして、私は彼宛に自作の本を送った。
「海の底の蝶の夢」は、今改めて読むと子供っぽく底が浅い。読み返しているうちに、気に入らない点が目についてくる。どうしよう。いっそ、作り直した方がいいかしら……。

そうこうする内、篠田さんから装幀を引き受けてくれると返事が来た。送った本に表紙をつけるだけなら手間も費用も掛からないと。費用については心配ない。外科医の主人は私が趣味程度に使うお金については何も言わない。二年前とは違うのだ。本をどうするかは、篠田さんに相談してから決めよう。
篠田圭介さんは、独身で主人より幾つか若い人。装幀を引き受けて貰えるなら、やはり一度お会いして打ち合わせをしなければならないけれど。でも大丈夫だろう。清潔な指をして、真面目で誠実な対応をして

くれる人だもの、きっと主人も気にしないと思う。私は、会って装幀の相談をしたいとお願いのメールを送った。

　それから二日後、篠田さんからメールが届いた。今週の土曜か日曜の午後、お茶でも飲みながら打ち合わせしましょう、と言う内容だ。土曜は主人が仕事でいないので外出するのに都合が良い。私は篠田さんに、土曜の午後一時、街中の喫茶店で待ち合わせをしましょうと返事を送った。程なく篠田さんから了解の旨を知らせるメールが来たので、私は自分の作品をまとめたポートフォリオを寝室のクローゼットの中から引っ張り出して中を改めた。

ベッドの上に座り、版画を並べて見比べる。それらは葉書ほどの小さなものだが、製作していた当時は、溢れる制作意欲と、それに付いていけない技術と才能に苦しみながら、何とか創り上げた連作だ。
作品を印刷したものではなく原画を見て欲しい。そう思って版画の幾つかを選び、クリアファイルに入れてバッグにしまった。小説の案を練っていた頃の覚書を書き込んだノートも一緒に入れる。本の相談をする時に役に立つかもしれないから。後は何だろう？　何を参考にお見せすればいいかしら？

立ち上がって自分のライティングデスクの引き出しを開けようとした時、ふいに壁に掛けた大きなオーバルの鏡に目が行った。顔を映して見ると、額の真ん中でゆるく分けられた栗色の髪が、肩の上あたりで大きめのウェーブを作っている。

あら、失敗した。先週のうちに美容院へ行けば良かったわ。
髪を撫で付けながら顔の右側を映して見る。
髪の生え際から額、右頬を撫でてみた。陽に当たらないせいか、色白で滑らかな肌。一見しただけでは分からない……。でも、よくよく見ればやっぱり分かるわ。人差し指で自分の顔のある一線をゆっくりとなぞった。そこにはうっすらと細い線が刻まれている。かすかな傷の跡が。
お化粧すれば分からないけど……。

鏡の中の自分をじっと見つめていると、突然、中の女が、自分と全く関係の無い赤の他人のような気がしてきて怖くなった。鏡に背を向けて、ベッドの上に広げたものを片付ける。そろそろ夕飯の支度をしないと。あの人は私にうるさい事は言わないけれど、健康的で美味しく温かい家庭料理にはこだわるのだ。ポートフォリオをクローゼットに戻し、私は寝室を出た。

篠田圭介さんが、話のし易い、面倒見の良い人ならいいなと思う。兎に角、土曜日に会ってみよう。私の作品をまとめた本を一冊、美しく満足のいく形に仕上げてくれさえすれば、それでいいのだもの。

印象

土曜の朝、僕は平日と同じ時間に起きた。普通なら昼近くまで寝ているところだが、真麻さんと待ち合わせすると思うとゆっくり寝ていられなかったのだ。
昨日の夜に、真麻さんに見せる為の資料はまとめておいたが、朝食を済ませてから、もう一度確認してみた。自分の作った本と他の装幀作家から購入した手作りの豆本、海外旅行の際に買ってきた古い革装幀の子供用の本、本の構造と装幀について書かれた本と自分の制作ノート、筆記用具、装幀に使われる革や布の見本などなど。

そして目印になるように、彼女の本も持って行く。本や紙ばかり詰めたバッグは、結構重くずっしりしている。デートではないが、それでも若い女性と会うのだから、あまりだらしない格好では行きたくない。シャワーを浴びてから、ストライプのコットンシャツに黒のジーンズを選んで着る。鏡を見てみると、黒縁の眼鏡を掛けた可も無く不可も無くの平凡な男がぼんやりした表情で映っている。

三年前だったか、飲み会の席で、少し好意を寄せていた後輩の女性社員に、篠田さんは良くも悪くも特徴が無いですね、と軽く笑われた事を思い出す。あれで気持ちが一気に冷めたっけな。変なことを思い出してしまい、苦笑しながら手ぐしで髪を整えた。白髪が増えてきているのが若干気になるが、髪の多い家系なのが有り難い。きっと四十代の後半には僕の髪は真っ白になるだろう。父も祖父も見事な銀髪なのだ。僕も彼らに習って、白髪になっても髪は染めないつもりでいる。

真麻さんは既婚者だし、単に本の装幀を頼みたいだけなのだから、僕の顔や髪がどんなだろうとどうでも良いだろうが、僕としては彼女がどんな女性なのかは大いに気になる。特別な期待をしているわけでもなければ、下心も無いけれど、仕事以外で女性とゆっくり話をするなんて、本当に久しぶりなので、やはり気持ちは少し華やぐ。

窓から外を見ると、空にはコントラストのはっきりした夏空が広がっていて、午後にはかなりの暑さになるだろう。待ち合わせは午後の一時だが、僕は待ち合わせ先の喫茶店で昼食をとる事にして早々に家を出た。地下鉄に乗って大通りまで出ると、夏休みにはまだ早いものの、快晴の土曜日は結構な人出だった。僕は強くなってきた日差しを避けながら待ち合わせ場所の喫茶店に向かった。まだ昼前なので空いているだろう。今の内に、落ち着ける場所の席を取っておきたい、と僕は少し早足になった。
本の詰まったショルダーバッグが肩に食い込んで、ちょっと辛くなってきた頃、僕は指定された喫茶店に着いた。

　街中のアーケード街に在る老舗の洋菓子店兼喫茶店は、入り口は狭いが中は意外と広く奥行きがある。客の年齢層が高めなせいか、若者向きのカフェのように込んではいなかった。僕は奥の方まで進んで、四人がけのテーブル席に座った。資料を広げる為に広いテーブルを使いたい。店の奥は少し暗く、壁に飾られた黄色いランプ型の照明が暖かな光を放って落ち着いた雰囲気だ。
　大きめのソファの布地は擦り切れて地の織りが透けて見えているが、座り心地は悪くなく、僕は緊張と一緒に重たいバッグを肩から下ろした。あまり若くないウェイトレスがやって来て、冷たい水の入ったコップを置きメニューを見せてくれたので、僕は日替わりランチとアイスコーヒーを頼んでメニューを返した。

ウェイトレスは四人がけのテーブルに一人で座っている僕を不満そうな顔で見ていたが、無愛想に少々お待ち下さいと言って厨房へ向かった。氷の入った水を一口飲んでから、僕はバッグの中から、彼女の本や装幀についての参考資料をテーブルに並べた。時間つぶしにそれらを読んでいると、すぐにウェイトレスがランチを運んできた。出来上がっている惣菜をレンジで温めて盛りつけるだけなのだろうが、食べる事にあまり興味の無い僕には、そんな料理でも十分なご馳走に思える。

ランチを食べながら、真麻さんに先に着いて食事をしている事を伝えておこうと思いつき、僕は携帯を取り出して彼女宛にメールを打った。店の奥の、壁にランプが灯っている席にいる事と、彼女の本をテーブルに置いてある事も書いておいた。するとすぐに真麻さんから返事が来た。彼女も既に街中まで来ていて、他の店で昼食を取っているところだそうだ。食べ終わったらすぐこちらに移動する、と書いてあったので、ゆっくりして下さい、と返事を送った。

初対面の人と一対一で話すのは苦手だ。特に相手が若い女性となれば尚更だ。真麻さんが穏やかで優しい人柄ならいいと思う。あまりにエネルギッシュで勢いの有る女性や、一方的におしゃべりな女性とは話したくない。本の作風からは、エキセントリックで奔放なイメージも受けるけれど、意外とシャイで大人しい人かもしれない。メールを読んだ印象からは、きちんとした真面目な人柄に思えたが、そういった第一印象が当てにならない事くらいは、流石に三十を過ぎれば分ってくる。

　ランチを食べ終わってアイスコーヒーを飲んでいる時、店のドアに取り付けられたベルがカランと鳴り、茶系の麻のスーツを着た若い女性が入って来た。
　僕はその人を見た時、直感的に、ああ、あの人が生方真麻さんだな、と思った。

　彼女は通路を歩きながら、店の中に視線を巡らせていたが、僕と目が合い、テーブルの上の本を認めると、微笑を浮かべて真っ直ぐ僕の方にやってきた。
　思わず僕も姿勢を正して、彼女の視線を受け止める。

「篠田圭介さんですね？」
少しハスキーで静かな声だった。
「はい、そうです。生方さんですね、ま、どうぞお掛け下さい」

僕は片手で向かいのソファを差して、ぎこちなく笑った。ゆるいウェーブのついた栗色の髪を揺らしてソファに掛けた彼女はほっそりしていて、特別な美人ではないが、色白の瓜実顔で上品な印象だった。服装から生活にゆとりが有るのを感じられ、多分同年代のOL嬢よりは落ち着いて見える。
僕は食べ終わったランチプレートを片付けながら、ウェイトレスに向かって手を挙げた。無愛想な件のウェイトレスがメニューとお冷を持ってやって来たので、彼女はアイスティーを頼んだ。

「何だか約束の時間を早めてしまったみたいで済みませんね。もっとゆっくり来ても良かったのに」
「いえ、私も早めに出てきて時間を持て余し気味だったので、丁度良かったです」
僕は彼女の少々物憂げと言ってもいい、静かな雰囲気に一先ずホッとした。いきなり本題に入るもどうかと思い、今日は暑いとか、街が人で一杯だ、などと世間話を少ししたところで、彼女の方から本の話を始めた。

「あの、メールにも書きましたが、私の本なんですけれど、やはり前に作ったものを装幀するのではなく、もう一度作り直したいと思っているんです」
「ええ、それは、あのー、版画自体も改めて作られるという事なんでしょうか？」
「はい。あれを作り直すのではなく、新たに版画の連作を作って本にしたいんです」
「そうですか。僕は中身が出来ない事には作業には入れませんが……本の構成についてはもうお決まりですか？」
「いえ、私、本の事、今更ですが良く分からなくて」
自嘲気味に頬を赤らめてそう言う彼女に、僕は初心者向きに作られた装幀の本を見せた。

「この本、分かりやすくていいですよ。良かったらお読みになって下さい。ほら、本は基本的に十六か四の倍数でページ数を決めると収まりが良いとか、目次、遊び紙の入れ方など、図入りで説明があるんです」
そして持参した自作の本や豆本、外国の絵本などをテーブルに広げ、手に取って見てみるように勧めた。彼女はそれらの本を手に取り、優しい手つきで開いたり触ったりしながら、きれい、とか可愛いとか呟いていた。僕は彼女が本を丁寧に扱うのを見て、この人となら良い本が作れそうだと気が楽になり、少し楽しくなってきた。

「作家の一点物を作るって、とても面白い仕事になりそうです。まずは中身なので、先に決めて頂けると助かるのは、サイズとページ数と紙かなぁ。版画の仕上がりを尊重しますから、装幀については後でゆっくり考えればいいですよ」
「そうですか。私、その辺の所もまだ曖昧にしか考えていなくて。ダメですね、せっかく篠田さんに来て頂いたのに」
彼女が申し訳なさそうに言うのを、僕は慌てて打ち消した。

「いえ、普通は本の構造とか細かく考えた事がないでしょうから当たり前ですよ。この装幀の本はお貸ししますから、参考にしてじっくり構想を練って下さい」

　僕が微笑むと、彼女も微かに笑ってくれた。その時、僕は彼女の笑顔に僅かではあるが違和感を覚えた。ほんの少し。僕の心に小さな砂粒のようなざらついた感触を残したのだ。

　それが何かは分からないまま、僕はその他にも持参していた、紙や革の見本、自分の覚書ノートなどを見せて、本を作る際の注意事項などを説明すると、彼女は自分のバッグから手帳を取り出し、熱心にメモを取った。

　僕が一通りの説明を終え、喉を潤そうとアイスコーヒーを飲むと、彼女はメモを取る手を休めて、バッグの中から一冊のファイルを取り出した。
「あの、これはお送りした本に使った版画なんです。よろしかったら見て頂けますか？」
「ああ、是非見せて下さい」

手に付いた水滴をおしぼりで拭いてからファイルを受け取ってページをめくると、それは本に使われたのと同じサイズの銅版画で、印刷物よりも線がくっきりと鮮やかで、匂い立つような質感があった。
「やっぱりオリジナルはいいですねぇ。紙とインクのマチエールは、どうにも印刷では再現出来ないな」
「そう言って頂けると嬉しいです。それと、これが製作時の覚書です」
手渡された大判のノートをめくると、僕はギョッとして思わず周囲に人がいないか確かめてしまった。そこに書かれた鉛筆のデッサンは、ほとんど女性の裸体だったのだが、あまりに赤裸々なポーズばかりで驚いたのだ。

「これはまた……本やネットで拝見した作品に比べると、かなり大胆な絵面ですね」
「私、あの本を作った頃はかなり遠慮してしまったんです。それに、こういう絵ですと、ネットに出すのは問題有るでしょうし」
「そうですねぇ……。バタイユの眼球譚を思い出します」
「あら、篠田さんは眼球譚をご存知ですか？」
「ええ、ちらっと見ただけですけどね」

大昔、僕がまだ高校生の頃だ。大きな書店の美術書のコーナーで、タイトルに惹かれて、あの本を手に取ったが、ページをめくった途端に、エロティックともグロテスクとも言える女性の裸体が目に飛び込んできて、奥手な僕は慌てて本を閉じその場を立ち去ってしまった。そう言えば、あの本の挿絵は銅版画だったのではないかと今になって気が付いた。

「私もあの作品、好きなんです。大学の図書館に立派な画集が有ったので良く見てましたよ」
「そう。でも、女性がああいうエロティックな本を読むのって抵抗は有りませんでしたか？」
「いいえ。あ、私、美大に通っていたので、皆んなそういう事で遠慮したりはしませんでしたね」
「ああ、なるほどね、美大卒なんだ。道理で趣味にしては作品の質が良すぎると思っていたんですよ」
「残念ですが、卒じゃないんです。中退したんですよ。四回生になった頃、交通事故に遭って通えなくなったんです」
彼女は静かに笑って言ったが、目には寂しげな影が差していた。
「それは災難でしたねぇ」

僕は、怪我をしたのなら休学して治ってから通うとか、一旦退学しても、後で復学するとか方法は有ったのではないかと思ったが、デリケートな話題になりそうだったので、あまりその話には深入りはせず、話のテーマを版画の方に戻した。

「あの本の挿絵って銅版画ではありませんでしたか？」
「うーん、眼球譚は色々なアーティストが挿絵を描いているので何とも言えませんが、篠田さんがご覧になったのはそうかもしれませんね。有名な銅版画家も制作していますから」

「そうですか。僕はそっちの方は無知でして。では、生方さんは、どちらかと言うとこちらの創作ノートに忠実な作品を作りたいのですか？」
「はい。今度は遠慮せずに自分の作りたいものを作るつもりです。成績とか販売とか考えずに、自分の為だけに作りたいんです」
「潔いですね。分かりました。それでは僕は生方さんの作品が出来るまで待ちますよ。いやぁ楽しみだな、生方さんの新作を生で見られるの」
「有難うございます。あの、よろしければ生方ではなく、真麻と呼んで頂けませんか」

僕は彼女の申し出にちょっと驚いたが、生方という堅い苗字より、まあさという柔らかな響きが心地良く感じられたので嫌ではなかった。
「僕は構いませんけど。でも、いいんですかねぇ。人様の奥様を友達みたいに下のお名前でお呼びして」
「いいんです。私、この生方っていう主人の名前、堅苦しい感じがしてどうも馴染めないんですよ。真麻っていう名前、気に入っているので、その方がいいんです」
「分かりました。それじゃぁ、これからは真麻さんで」
「よろしくお願いします」

二人で何となく照れ笑いをして下を向いた。僕は一回りも年下の人妻を相手に、ちょっとふわふわした、くすぐったいような気持ちになっている事を心の隅っこで恥ずかしく思い、自制心が静かに頭を冷やせと命じるのを感じた。そして、薄くなったアイスコーヒーを一口すすり、彼女の物静かな顔をチラリと見た時、ふいに先ほど感じた僅かな違和感にもう一度思い至った。

彼女の落ち着いた微笑は、きれいなのだけれど、何だか感情がこもっていないように感じるのだ。口元は口角が上がり白い歯を微かに覗かせ自然な笑みなのだが、頬から目元にかけては人形のように変化が無い。いや、全く無いわけでは無いと思うが、極めて動きが乏しいのだ。
　京人形とか雛人形を思い出させるような、そんな目元だった。彼女の少し硬質な微笑は決して嫌なものではなかったが、どこか冷めた悲しい趣があった。

　若い芸術家は、きっと普通の女の子とは違うんだろうと思いながら、僕らはいつまでも本と版画の話を続け、気がつくと三時間ほど時間が経っていた。
「真麻さん、お時間は大丈夫なんですか？」
「ああ、もうこんな時間。そうですね、篠田さんもせっかくのお休みですし、今日はこの辺で」
「僕は暇なのでいいんですが、真麻さんは主婦だからお忙しいでしょう」
「そうでもないんですが、夕食の準備がありますので…」
「ですよね。それじゃぁ、本の中身について構想が決まったら、また連絡して下さい。何か聞きたい事があれば、メールして下さいね」
「はい、ありがとうございます。宜しくお願いします」

　そう言って彼女はにっこり笑ったが、やはり頬から上は作り物のように冷めた感じがした。喫茶店の勘定は僕が払うつもりだったが、わざわざ来てもらったからと真麻さんは素早く勘定書を手に取り、レジで支払いを済ませてしまった。店の外に出ると、彼女は地下鉄駅へ、僕は街の大きな書店へと別方向に分かれる事になった。

「今日は色々ありがとうございました。お借りした本、しっかり読ませて頂きますね」
頭を下げた彼女の栗色の髪がふわりと優しく揺れた。
「いえ、とんでもない。こちらこそご馳走になった上に面白いお話が聞けて楽しかったです。それじゃ気をつけて」

僕は地下鉄に向かって歩いて行く彼女の後ろ姿をしばし眺めてから歩き出した。感じの良い女性で良かった。そして魅力的すぎる人でなくて良かった。僕は変なところで安堵していた。
彼女も欲しいし結婚もしたいが、不倫などという面倒な関係になるのは嫌だ。彼女があまりに魅力的で、会い続けるうちに恋に落ちてしまうような女だったら、親身に相談に乗るのを避けてしまっただろう。

彼女の硬質で人形のような微笑は、返って僕を安心させてくれる要因の一つだった。彼女のご主人はどんな人なんだろう…。考えても無意味な事ではあるが、自分の妻が趣味で銅版画を作成したり、良い素材の服を着るのを許しているのだから、女性に寛容で経済的にもゆとりの有る人なのだろうと想像できる。

――彼女が独身だとしても、僕とは釣り合わないかもなぁ……。
少しばかり侘しい思いが心に浮かんだが、アーケード街を抜けて良く晴れた夏空の下に出ると気分も変わり、僕は目当ての書店に向かって歩いた。

真麻

夫以外の男性と、こんなに長い時間話をしたのは本当に久しぶり。いいえ、男性に限らず、誰かとこんなに長い時間、個人的なお喋りをしたのが随分久しぶりなのだわ。私は改めて思い知る、自分の人付き合いの悪さに苦笑いした。学生時代の友人ともほとんど連絡を取っていないのだ。

あの交通事故で、車を運転していた同じ大学の恋人と助手席の私は重症を負った。私は顔面を複雑骨折し皮膚は裂け、何度も何度も修復の為の形成手術を受けたのだ。やっと退院した時、先に退院していた彼は、既に学校を退学して実家に逃げてしまい、それ以来二度と顔を合わせていない。形成手術は上手く行ったと言えるだろう。家族や友人は、きれいな顔に治って良かったと喜んでくれたが、私はうっすらと傷跡の残るこの顔を見る度に、軽い目眩に似た嫌悪感を覚える。

――私の顔じゃない……。

私は次第に昔からの友人や知人を避けるようになり、結局大学も中退してしまった。最初の頃は、あれこれ気を使って連絡をくれた友人達も、頑なな私に愛想を尽かしたのか連絡は絶え、すっかり疎遠になってしまったのだ。何年経っても、鏡に映る私の顔に未だに慣れない。だから、昔の写真やアルバムは全部ダンボール箱にまとめ、クローゼットの奥にしまってある。私はこの顔に慣れなければいけないのだ。昔の顔がどんなだったか、思い出して比べてはいけない。

　一度、母に、すっかり変わってしまった自分の顔がとても嫌だと泣きついた事がある。母は途方に暮れたように私の顔をじっと見つめ、全然変わってないよ、前とおんなじだよ、強いて言えば表情が悲しそうなのよ、それだけよ、と言った。きっとこの違いは自分以外には分からないのだと思うと、それもまた苦しく悲しかった。こんなに違うのに、どうして他の人には分からないんだろうか。表情を明るくしようが化粧を濃くしようが、私の顔は元には戻らないのだ。そして、この気持を分ってくれる人は何処にもいないのだわ。命が有り体も元に戻ったのだから幸運だと言った人もいたが、そんな単純に割り切れるものではない。

世の中には、誰にも気付かれないまま、永遠に失われてゆくものが無数に有るのだと思う。それをいちいち惜しむのは無意味かもしれない。そんな事は分っている。でも私は、この移ろい行く世界に、何か一つ自分自身の証になるものが欲しくなった。
私は自分の作品という形で私を残したい。篠田さんと話して、私の思いは一層強く熱を帯びてきた。

早く帰って構想を練りたい。勢いのあるうちに手を付けてしまわないと、日々の雑事に追われて情熱が失われてしまう。私は足早に地下鉄駅に向かった。子供達で込んでいる地下鉄に乗って、つり革に掴まり立ったまま本の事を考え続けた。
サイズは大きくなくていい。手のひらサイズでも良いのだ。篠田さんに見せて貰った洋書の詩画集の様に、左ページに文章、右ページに版画を入れて、見開きで読めるようにするといいかもしれない。文章は別の紙にプリントして美しく貼り込むというのはどうだろう。
自分の本のイメージが膨らんできて、楽しさに気持ちが高揚してきた。本当にこんな気持になるのは何年ぶりだろうか。

版画のエスキス、添える文、本の展開図。まずはこれに手を付けて、大体の形が決まったら、また篠田さんに相談してみよう。
地下鉄が自分の降りる駅で止まり、私は他の人達に続いて車両を降りた。地下鉄の窓やドアに映る自分の姿が嫌いだ。薄暗い幽霊のような曖昧な像で、これが他人から見える自分なのかと思うと、恐ろしくて目を背けたくなる。

地下鉄の改札を出て、通路に直結している大型スーパーへ立ち寄り、幾らか食材を買って帰った。夫は和食が好きだ。結婚前は料理などしたことのなかった私は、彼との結婚を機に頑張って料理に挑戦した。何かを作るという事自体は好きなので、二年経った今では、それなりに来客ももてなせるくらいの腕前になったと自負しているが、自分は食べる事にあまり執着が無いので、彼が不在の時は時間が勿体無いので殆ど料理はしない。

今日は多分早く帰れると言っていたが、どうなんだろう。
家に着いて食材を冷蔵庫に入れ、居間のソファに座って一息ついた。スケッチブックを出して構想を練るべきか、それとも料理の下拵をすべきかしら。一瞬迷ったが、私は着替えて料理をする事にした。私が毎日好きに暮らしていられるのは、あの人のお陰なんだし。そして、この顔をまがりなりにも綺麗な状態に治してくれたのもあの人……。

私は部屋着に着替えると、エプロンを付けてキッチンに立ち、食材の野菜を切り始めた。あの人と私が付き合いだしたのは、彼が前の奥さんと離婚前提の別居をしてしばらく経ってからの事だったけれど、病院の職員達が私の事を、略奪愛だの、魔性だのと見当違いな噂をしていたのを知っている。
誰しもそんな下世話な話が大好きなのだろう。私は彼の前の奥さんの事を何も知らない。子供もいなかったので、お金の事が片付いたらすんなり別れてくれたそうだ。その人は家事を殆どしなかったせいか、私がこの一戸建ての家に入った時、彼女の痕跡は殆ど何も見当たらなかった。

超多忙な営業マンと同居していたみたいだった。
夫が自嘲気味に彼女との結婚生活を話してくれた時のセリフだ。その乾いた結婚生活の反動で、私みたいな外で働いた事もない、世間知らずの美大生崩れなんかに興味を持ったのかもしれない。私はと言えば、崩れた顔と離れていった恋人に絶望し、ただ生かされているように病院でぼんやりした日々を送っていた頃、親身になって治療に当たってくれた彼に感謝はしていたが恋愛感情など微塵も持っていなかった。退院したら、お祝いに食事にでも行こうと言われた時も、患者を励ます為の方便としか思っていなかったのだ。
退院が決まって今後の治療について話し合った後、本当に外で会う約束を交わした時も、随分面倒見の良い先生だなと思ったくらいで、全く男性として意識していなかった。

私は当時二十三になったばかりで、彼は丁度四十歳だった。恋愛の対象にするには、いくら何でも歳が離れすぎていると思い込んでいたせいもある。彼が担当医という立場からではなく、一人の男として私に関わりたがっていると分ったのは、退院後に高級レストランの個室で会食した時だったが、その際も何だか冗談のような気がして笑ってごまかしてしまった。

自分の顔を見る度に嫌悪感を覚え、創作意欲を全く無くし、ただその日その日を生きるだけで精一杯だった自分には、恋愛も結婚も別世界の話のように現実味がなかったのだ。
鷹揚で紳士的だった彼は、そんな私に腹を立てる事もなく、まぁ気が向いたらまた話し相手になって下さい、とニコニコ笑っていた。彼としては、広い一軒家で独りっきりで暮らすのが寂しく不便なので女友達が欲しいのと、体のみならずメンタル面でも弱っていた私を支えたいという両方の気持ちがあったらしい。

患者さんと個人的に付き合う事は戒めていたんだけれど、真麻さんの事は何だか放っておけなくてね。せめて僕があと十歳若かったらなぁ、と彼は鼻の頭に汗を浮かべて笑った。シャンデリアの柔らかな光がその汗を光らせていて、私はそれを見て、ああこの人も緊張するんだ、何でも無いように笑っているけど一生懸命なんだと気が付き、取りあえずいい人だし、たまに会うくらいならいいだろうと心を開いたのだった。

私達が男女の仲になったのは、彼の離婚が成立してから後の事で、それは彼なりのケジメと気遣いだったのだろう。大学を中退し、創作も出来ず仕事もせず、じっと家に引き籠って何時間も自分の顔を鏡で眺める不毛な日々を過ごしていた私は、彼に誘われた時も結婚の申し出を受けた時も、彼に対して恋愛感情は持っていなかった。実家でニートとして引き籠るより、裕福な医者の家で主婦として引き籠る方が、両親にとっても自分にとってもいいのではないかと、そう思った。そんな理由で結婚したなんて、夫が知ったら悲しむだろうか……。

　考え事をしながら料理の下拵をしているとインターホンが鳴った。出てみると夫だった。今日は本当に早く帰って来られたようだ。私はドアのセキュリティをはずしてドアを開けてあげる。しばらくするとスーツの上着を脱ぎ、額に汗を光らせて夫が居間に入ってきた。

「いやぁ、暑いね。全然風が無いんで参るよ」
すぐにネクタイをはずし服を脱ぎ出す。
「シャワー浴びるんですか？もう、そこで脱がないで下さい」
結婚してみると、彼は医者としては立派で有能だが、大人の男としては子供っぽくだらしのない所が沢山ある事が分った。そういう欠点が有った方が私としても気が楽だったが。
夕食を二人で食べ終わり冷たい麦茶を飲んでいると、夫が私に尋ねた。

「今日、出掛けたの？」
「ええ、買い物に。どうかした？」
「いや、ちゃんと化粧してるなと思って」
「日焼けしますから」
「ふーん」
夫は生返事をしてテレビのスイッチを入れた。多忙な夫が、こうやって家でのんびりテレビを見ていられる機会は少ない。彼が家で寛げる時間を持てた事を喜ぶ一方で、今日は早く帰って来なければ良かったのにと思う自分がいる。
早く洗い物を済ませて、篠田さんに借りた本を読みたい。それから自分の作品の構想を練りたい。私は手早くテーブルの上の食器類を片付けてキッチンに運んだ。

篠田

真麻さんと別れた後、僕は街の大型書店に行き、美術書のコーナーで眼球譚の画集を探してみたが見当たらなかった。店員に探してもらおうにも、自分が昔、書店で偶然見かけたのは二十年も前の事なので、出版社や翻訳家の名前など覚えていないので無理だろう。
僕は、せっかく来たのだからと、銅版画の画集をいくらか開いて見た。どうも銅版画という手法は、耽美で幻想的なモチーフにぴったりなようだ。ヨーロッパ風な情景や人物像が多いが、僕は和風や中国風でも良い作品が作れそうなのにな、と思った。

真麻さんはどんな作品を作るんだろう。僕は、彼女の気に入るように本の装幀をするだけだから、彼女の作品に口を挟んだり評価したりするつもりは毛頭ない。しかし、どんな美しい作品を見せて貰えるかは、とても興味が有るし楽しみだ。真麻さんの作品が出来ない事には、僕も装幀のデザインのしようがないのだが、それでも彼女の為に勉強出来る事はしておきたい。お互い良い仕事が出来ればいい。

僕は立ち読みで足が疲れて来たし、肩に掛けたショルダーバッグも重いので、早々に家に帰る事にした。午後の日差しは夏らしく眩しかったが、僕は夜行性の生き物のように日差しを避けて、すぐ近くにぽっかり口を開けていた地下鉄の入り口に潜り込んだ。地下鉄に乗ると、意外と中は空いていたので、僕は重いバッグを下ろして座席に座った。向かい側の窓ガラスに、彩度の落ちた僕の姿がボンヤリと映っている。まさに休日のサラリーマンを絵に描いたような平凡さだった。

良くも悪くも特徴が無い、か。いつか、そうだな、定年になって時間がたっぷり使えるようになったら、その時はプロの装幀家になろうか。窓に映った僕が皮肉な笑みを浮かべている。そんな風に考えているんじゃ、まぁどうしようも無いよ。そう言っているみたいだった。

夜になって、真麻さんからお礼のメールが届いた。これから僕が貸した本をじっくり読み、作品の構想を考えると書かれていたので、僕は焦らずじっくり時間を掛けて良い作品を作って下さい、と返事を送った。
ネットで今日探せなかった「眼球譚」を探してみたが、僕が昔見た本は見当たらなかった。
自分の記憶では、もっと画面が黒っぽくグロテスクだった気がするが、なにせ二三ページめくっただけで閉じてしまったので、はっきりとは思い出せない。

絶版になったのかもしれないし、古本でも見つけられないので、本を探すのは諦め、挿絵として使われた画像を探す事にした。画像検索に引っかかった挿絵の画像は、どれもこれも淫猥で暗く美しかった。男と絡んでいる裸体の少女は、狂った肉欲に陶酔していて、見ている方もそのおぞましい情欲にそそられて目を離せなくなる。こんな猟奇的な絵に興奮するなんて、人間てのは業が深い生き物だ……。

小さな画像を開いては見るを繰り返しているうち、僕は目が疲れてきてブラウザーを閉じた。昼間見せて貰った真麻さんの鉛筆画は、ネットで見た画像に負けず劣らず淫らだった。
ああいう絵を描きたいって気持ちは良く解らないが、人間の情念とか、本質の暗い面を描き出そうとすると、ああなってしまうのだろうか。真麻さんの新しい作品を早く見たいとは思うが、あのような生々しい作品を二人で顔を付き合わせて見るのは少々気まずいな。

いやいや、僕がもっとインパクトの有る装幀をしてみたいと思っていたところに真麻さんが現れたのは、神の采配かもしれない。こんな機会は滅多に訪れないのだから、しっかり彼女をフォローして良い本を作らなければ。

僕はパソコンの前を離れキッチンへ行き、冷蔵庫からアイスコーヒーのボトルを取り出してグラスに注いだ。酒を飲むと眠くなってしまうので、家で飲むのは専らコーヒーだ。グラスを持って、またパソコンの前に座り、今まで真麻さんから貰ったメールを読み直す。
メールの印象も会ったときの印象も、やはり年齢よりしっかりして落ち着いている気がする。結婚すると、女は若くてもしっかりするものなのだろうか。

今年三十六になる独身の僕の方が、よっぽど青臭い感じだ。彼女と僕の共通点と言えば、自分の頭と手と感性を使って、何かを創り出したいという気持ちが胸の中に渦巻いている所だろうか。
「まぁ僕の場合は趣味の範疇だけどな…」
裕福な家で暮らし、お金と時間に縛られずに好きなことに熱中出来る真麻さんの事が、僕は少し妬ましくなった。

次の日の日曜日、僕は古書店で大正、昭和に発行された文芸書などを探して歩いた。ネットの古書サイトでも探せるが、店頭販売だと思わぬ拾い物が特価の百円で買える事も珍しくないので、僕はなるべく地元の古書店やデパートなどで開催される古書市で本を探すことが多い。
二三軒まわってあまり収穫は無かったが、戦後間もない頃に出版された、仙花紙本と言われる粗雑なペーパーバックを一冊買って帰った。一時期、時代小説などで人気を博した作家の現代もので、中身にあまり興味は無かったが、表紙の木版画っぽいデザインが気に入って買ったのだ。年月を経て、毛羽立ち印刷の薄れた表紙に、僕は何とも言われぬ愛おしさを感じる。

昨日今日と歩いて疲れたし、自分で料理をするのも面倒なので、外で夕食を済ませて家へ帰った。そして家でコーヒーを淹れ、一人ダラダラと本を眺めるのが楽しい。何とも地味な休日の過ごし方で、こんな生活では彼女を作るどころか友達とも付き合えない有様だが、自分としてはこれで十分満足なのだ。

夜も更け、僕は読みかけの本をテーブルに置いてベッドに潜り込んだ。灯りを消して暗闇の中で天井を見つめていると、昨日真麻さんに見せて貰ったスケッチの暗い線が再び蘇り、うねうねと蠢きだした。昼間はいいが、どうも夜になるとあの淫らな絵が思い出されて仕方ない。
若い娘のあられもない裸体は、猛り狂った猫科の猛獣のように恐ろしく蠱惑的だ。すっかり草食系になった僕でも、まだ妄想の中で血が沸き返る事は有るらしい。性欲は創造の妨げになると嫌悪したのは誰だったろうか…。

月曜日、通い慣れたビルのドアをくぐり、セキュリティカードをかざしてオフィスのドアを開ける。タイムカードを押して自分の部署に向かい、上司、同僚、部下に挨拶して席に着く。何年も毎日のように、催眠にかかった人形の如く、オートマチックに動く自分の動作に気づいて、時々自分でも呆れる事がある。
総務課の係長というポジションは、几帳面ではあるが人付き合いが得意ではない僕にとって、割合居心地が良い。たまにクレーム処理だの、債権回収だので他部署の応援に駆り出される事はあったが、おおむねルーティンワークなので、自分のプライベートな時間をきちんと確保する事が出来る。
ルリユールで独立したい夢は持っているが、この会社の正社員の立場を捨てるほどの勢いと決意は、まだ僕には無いのだ。

いつも通り、山積みになった書類や伝票を片付けていると、あっという間に昼になる。僕は上司が若い部下達を昼食に連れ出すのを見届け、少し遅れてから食事をしに出掛けた。上司の課長は、あまり僕と歳が変わらない。若い子に奢るのは良いだろうが、僕のような中途半端な者が一緒だと面倒だろうと言う、僕なりの気遣いだ。

どこで食べようかと考えながら歩いていると、後ろから誰かに声を掛けられた。振り向くと、同じ会社の松井美緒という女性がニコニコと笑っていた。僕より二三歳年下で、営業アシスタントをしている。
「ああ、松井さんか」
彼女は丸顔をクシャッと歪めて笑った。澄ましていればそこそこ可愛い人なのだが、笑うとすごく顔が崩れる。ぽっちゃり目の体をグレーのスーツに包み、片手に財布とハンカチを握りしめていた。

自分の勤め先は、何年か前に女性の制服を廃止したので、みんな常識の範囲内で好きな格好をしているのだが、松井さんは年長格のせいか、いつもスーツを着ているようだ。
「篠田係長、お昼食べに行くんですか？」
「そう。ちょっと出遅れたから、どこも込んでるよねぇ」
「この先のビルの地下がちっちゃい食堂街になっているんですけど、いっつもガラガラなんで行ってみません？」
「そうか。じゃぁ行ってみようかな。松井さんも一人なの？」
彼女は、また少し顔を崩して笑った。
「一人の方が気楽な歳になっちゃいましたよ」
「そう？」
「同期なんて、もう一人もいないですもん」
「ああ、そうか。それは淋しいね」

女性職員同士の付き合いには、男には分からない面倒事が多いらしい。一回りも年下の後輩達に合わせるのは疲れるのだろう。僕達は寂びれ気味の食堂街に行き、その中のパスタ屋に入ってランチを頼んだ。
「穴場だね、ここ」
十人も入れば一杯になる小さな店だが、落ち着いた内装で、料理は美味く値段も良心的だった。
「そうでしょう？　食堂街の入り口がちょっと飲み屋街っぽいんで、若い子には敬遠されるんですけど、入っちゃえばいい店が多いんですよ」
「女性は気にするのかもな。僕みたいなおっさんには気にならないけどね」
「まぁ、篠田係長はおっさんじゃないですよ。五歳は若く見えますって」
「そうかい？　おっさんでいいよ、僕は」
「またぁ」

松井さんはおばちゃんみたいに、顔の前で手の平をくいっと振ってみせた。彼女とは社内で仕事上の話をするくらいで、こんな風に二人で話すのは初めてだが、営業部にいるせいかお喋りで人あしらいが上手い人だ。
松井さんは、ランチに付いているサラダをフォークでつつきながら、ちょっとかしこまったように僕に尋ねた。

「篠田係長はお休みの日って何してるんですか？」
「うーん、古本屋巡りかな。あと、街をブラブラとか……」
これを言うと、大抵の女性はつまらなそうな顔をする。装幀の事は、説明が面倒なので人には言った事が無い。
「はぁ……。係長、本とか好きそうな感じしますね、そう言えば」
「松井さんは？」
「あたしは飲んでます」
ニカッと笑った。酒好きなのだ。

「飲み友達が沢山いるんだ。いいじゃない」
「減る一方なんですよねぇ。やっぱ結婚すると、夜は出掛けられないですよねぇ」
「そうだろうねぇ」
たわいの無い話をしながら、ランチ後のアイスコーヒーを飲んでいると、松井さんが周りを見渡してから小声で聞いてきた。
「篠田係長って、ウチの宮下主任と同期ですよね？仲、いいです？」
「宮下かい？　入社当時は良く飲みにいったりしたけど、部署も違うし、あいつが結婚してパパになってからは、個人的には殆ど会わなくなったね」
「そうですかぁ……。奥さんも同期だったんですよね」
「ああ、二三年勤めて寿退社したけど…主任がどうかした？」
松井さんは、残り少なくなったアイスコーヒーの氷をストローの先でつつきながら、言おうか止めようか迷っているようだった。

「何？　気になるなぁ。奥さんと何かあったの？」
「……これから揉めるかも…」
僕は驚いて松井さんの顔を見つめた。同期の宮下とはそれほど仲が良いわけでは無いが、顔を合わせば冗談も言うし、新婚当時には新居へ招かれ、やはり同僚だった奥さんの手料理をご馳走になった事もある。今は子供も二人いるし、マイホームパパとして穏やかに暮らしていると思っていたのだが、違うのだろうか。
「揉めるって、どうして？」
「なーんか……ツマミ食いしてるっぽいですよ。ウチの後輩……」
そう言うと松井さんは肩をすぼめ、水のようになったアイスコーヒーをストローですすりこんだ。ああ、不倫なのか、と僕はゲンナリした。

「もう周りも何となく気づいてるんで、注意してあげた方がいいかも……」
「僕が？」思わず前のめりになる。
「だって、こんな事、上司や部下に言われるのは嫌でしょう？　あ、誤解しないで下さいね。私、こんな事頼む為にお声掛けたわけじゃないんですよ。話しているうちに思い出しちゃったんです」
僕は困って髪をかき上げた。そういう話は苦手なのだ。人の生活に、あれこれ口を出したくない。それなのに、これは聞いておきたい。
「で、その後輩って誰？」
「純ちゃん」

僕は口を半開きにして頷き、椅子の背もたれに体を預けた。
営業部の純ちゃんとは、僕の事を良くも悪くも特徴が無いと評してくれた、スレンダーな美人だった。
河原純は、勝気で頭の回転が早く仕事も出来ると、社内での評判は良い。派遣から転職し今年で四年目だが、去年一般事務から営業アシスタントに異動したのだ。
言いたい事をズケズケ言うので煙たがる者もいたが、その見た目の美しさと愛嬌で全てが許されるタイプだ。同い年の彼氏がいると噂で聞いていたが、いつの間にそんな事になっていたのだろう。

一方、宮下は、若い頃はスポーツマンで精悍な気の荒い男だったが、最近は顔も性格も丸くなり、話が上手く腰の低い、やり手の営業マンになっていた。
結婚前はかなり派手に遊んでいたので、浮気していると言われても驚きはしないが、まさか部下の女の子に手を出すとは思ってもみなかった。

「河原さんて、幾つだっけ？　二十七、八？」
「今年二十七ですよ。まぁ、主任は遊びなんでしょうけど……。あの娘、あからさまに主任にベタベタするんで、みんな気になっちゃって。そのうち、主任の自宅へ突撃するかもしれませんよ」
「ええ？　そんな事するかなぁ？」
「分かんないですよ、怖いですもん、あの気の強さ。あ、もうそろそろ出ません？」
「そうだね。あ、僕、ご馳走するよ。いい店教えて貰ったし」
「やーだぁ、いいですって。彼女でもないのに」

松井さんは笑って勘定書きを手に取ると、レジの女の子に一人ずつ払いますと声を掛け、会計を済ませた。
社に戻る道すがら、僕は独り言のように疑問を口にした。
「河原さんみたいな女性なら、若くて独身の男が幾らでも寄って来ると思うけどなぁ。なんで中年になりかけの既婚者なんかに引っかかるんだろう？」
「純ちゃんは、若い彼氏と別れた後だったみたいだから、趣向を変えたんじゃないんですか？　主任はアレですよ、長い時間を一緒に過ごすと摩擦で発火するって言うアレ。今年に入ってから、すごく残業増えたから。」
「え？　摩擦で発火？」何の事だか解らない。
「そうそう、摩擦熱が眠っていた恋心に火を付けたんですよ、きっと」
松井さんのしたり顔が可笑しい。

「人間関係の摩擦で恋心に火が付くのか……。でも、みんながみんな発火するわけじゃないよね？」
「そりゃそうですよ。需要と供給というものが有るし、恋心という燃料が無ければ、きな臭くなって終わりです」
　僕は彼女の話が可笑しくて吹き出してしまった。
「ははは、君の分析はすごく面白い。いいエッセイストになれそうだ」
「毒舌で有名ですからね、私」
　そう言うと松井さんは、また顔をクシャッと歪めて笑った。

　僕達は社に戻ると、それじゃと挨拶してそれぞれの部署へと別れた。
　午後の仕事を黙々とこなしながら、頭の隅っこで松井さんの言っていた「摩擦熱による発火」について考えてみる。
　僕と松井さんが、どれだけ長く時間を共有しても、多分発火はしないだろう。焦げる事さえ無いと思う。河原さんとはどうだ？　僕が熱を持っても、彼女の方が冷めたままだろうから、これもダメ。所詮は需要と供給とタイミングって事か。

真麻さんは？　僕はパソコンのキーを打つ手を止めて、彼女の顔を思い浮かべた。硬質で透き通るような白い肌。熱など帯びたことも無いような、磁器を思わせる冷ややかな印象。
――彼女は既婚者だしな…。
それにしても、僕が宮下に忠告する必要が有るのだろうか？　僕は頭を軽く振って、再びパソコンの画面に意識を集中させた。

仕事が終わるのは五時半だが、デスクを片付けてタイムカードを押したのは七時半頃だった。オフィスの出口で、僕はちょっと営業部の方を伺って宮下の姿を探したが、彼の姿は見当たらず、二三人の営業マンが黙々と事務処理をしているのみだった。今日は割と早くみんな上がったようだ。営業の連中は、残業の後にしょっちゅう連れ立って飲みに行くようだが、総務の職員は、会社の付き合いは極力避けて真っ直ぐ帰るのが常だ。

　帰宅途中でスーパーに寄り、適当に惣菜などを買って帰った。一人暮らしを始めた当時は料理も面白いと思い、何冊かレシピ本を買って凝った料理も作ったが、今では面倒になり出来合いの物に頼る方が多い。
　朝の残りのご飯と買ってきた惣菜を皿に移し替え、ラップを掛けてレンジで温め、テレビのスイッチを入れる。特に見たい番組は無いが BGM 代わりだ。一人の食事に時間をかけるわけもなく、テーブルに皿を並べてから食事をし、皿を片付けるまで十分もかからない。

　冷蔵庫に冷やしてあったアイスコーヒーを飲みながら、パソコンのスイッチを入れメールチェックをしたが、今日は真麻さんからのメールは無かった。ここしばらく、初めての打ち合わせの為に頻繁にやり取りをしていたので、彼女からのメールが無いと少し物足りなさを感じた。彼女のサイトもチェックしてみたが、特に更新もされていないので、僕はブラウザーを落としてパソコンのスイッチも切った。
　ダラダラとネットに接続していると、あっという間に時間が経ってしまうので、必要な事が無い限りネットサーフィンはしないように心がけているのだ。

僕はテレビも消して、やりかけのブックカバー作りをする事にした。これは一度、母に作ってあげた物が好評だったらしく、先日追加リクエストと共に着物の端切れを送り付けられたのだ。女物の花柄の生地で、なかなかモダンでセンスが良い。
僕の部屋には、こういった布モノの処理をする為に、小型のミシンが有る。女性がこの部屋を訪ねたら、2LDK とは言え半分工房と化した雑然とした様子に、入るのをためらうかもしれないなと思う。

母が送ってきた生地の量だと、文庫本サイズのカバーが二枚作れそうだ。今日は生地にアイロンを掛けて、型紙に合わせてパーツに切るところまでやってしまおうと、作業テーブルに道具を広げた。
手を動かし始めると、仕事の事や同僚の不倫の件など頭から消えてしまう。集中しないと良いものは作れないのだ。僕にとって何かを作るという行為は、最高の楽しみであると同時に、精神修養でもあり瞑想とも言える。

僕は大事な作業に手を付ける時、音楽は掛けないし、時には電話のラインも抜いてしまう。それは製作中のみならず、何をどう作るか考える時さえ、そうする事がある。多分、己のキャパシティが小さいせいだろう。周囲の雑音に惑わされやすいのだ。

芸術家の中には、次から次へと奔放な恋愛をして、それを自分の作品に反映させながら人生を謳歌するタイプもいれば、創作意欲を性欲で妨げられるのを嫌って周囲から異性を排除するタイプもいる。僕は芸術家ではないが、どちらかと言えば後者の方だと思う。前者のような自由人に憧れもするが、とても自分には出来そうに無い。

気持ちを切り替え、生地にスプレーのりを掛けてから熱くなったアイロンでシワを取り、型紙を動かしながら柄が一番美しく見えるようにパーツを切り出す。ブックカバー二枚分のパーツを切り終えた時、時計は午後十一時を過ぎていた。
夜遅くにミシンをかけるのは気が引けるので、今日の作業はこれで終わりにした。一息付いてから、またパソコンのスィッチを入れてメールチェックをしてみたが、ジャンクメール以外に届いているものは無かった。僕はパソコンを切り、シャワーを浴びてから寝ることにした。

それから数日、これと言って何も無い、いつもの日常が続いた。母のブックカバーは既に仕上がり、手紙を添えて送るばかりになっている。手紙を書くのが億劫で、置いたままになっているのだ。
金曜日の夕方、週明けに行われる会議の為に、別の階にある会議室へ備品の確認に行こうと廊下を歩いていると、使われていないはずの会議室から人が出てくるのが見えた。

会議室を使うには事前に予約を入れる必要があるので、訝しく思いながら近づくと、それは営業部の河原純と宮下主任だった。僕の姿に気が付くと、それまでニコニコ笑っていた二人はサッと顔色を変え、河原さんは僕が来た方向と逆側の階段に向かって足早に去って行った。
宮下は、ちょっと困ったような不貞腐れた顔をしてズボンのポケットに両手を入れ、こちらに向かってゆっくり歩き出した。
「篠田係長、お疲れさん」
右手を上げて通りすぎようとするので、僕は思い切って言っておく事にした。

「噂になってるぞ」
それだけ言えば十分だろう。宮下は睨むように僕の顔を見つめ、何も言わずに立ち去った。宮下は彼女と別れるだろうか。それとも、このまま上手く立ちまわるつもりか……。それは僕には関係の無い事だが、彼の奥さんの事を思うと、やはり少し胸が痛む。

妖精

篠田さんに会った日は、結局借りた本を読む事も出来なければ、作品の構想を練る事も出来なかった。夫がテレビを見ているうちに洗い物を済ませ、シャワーを浴びてから居間に戻り、本や資料の入ったバッグを持って自分の部屋に行こうとしたら、夫に腕を掴まれた。
振り向くと、彼は真面目な目をして私の顔をじっと見つめた。私は彼の意図を理解して、手に持ったバッグを下に下ろし、彼と一緒に寝室へ向かった。あんまり好きじゃないけど、仕方ない。

彼としては若い私を可愛がりたいのだろうが、私は実年齢以上に歳を取り、そういう情熱はもはや枯れかけている。私の知っている男は、この人と昔一緒に事故に遭った元彼の二人だけだ。同い年だった元彼との関係は、動物の子供のようにじゃれ合い睦み合い楽しかったけれど、夫との触れ合いに、そういう楽しさは、なぜだか感じられなかった。

初めてキスをした時に何となく違うと思い、初めてお腹の上に乗せられた時も、落ち着かない気持ちが消える事はなかった。身体に触れられれば反応はするけれど気持ちが乗らない。ただただ、彼が早く済ませてくれればいいと思いながら、あらぬ空想で気持ちを紛らわせ時間の過ぎるのを待っている。

夫が子供を欲しがるので私達は避妊をしないが、私は子供が出来たら、もうこんな事しなくても済むのではないかと内心期待しているのだ。一緒に暮らして二年にもなるのに、結局のところ夫が私の事をどう思っているのか、私にはよく分からない。
　一つ分っているのは、彼は、彼が修復した私の顔をとても気に入っていると言う事だ。暗闇の中、彼は私の顔を指で撫でる。何度も何度も繰り返し繰り返し。

この人は私の、この仮面のような顔を愛しているのだと思う。そしてこの人には、私の体に気に入らない点が一つ有る。薄い羽根布団をはねのけて、夫は私の背中から腰に手を滑らせ、右腰の辺りで手を止めた。
「これ、レーザーで取れるよ？」
私の右腰の下からお尻の上辺りに小さく、幼い裸の妖精が黒い線で描かれているのだ。それは元彼が私に彫ったタトゥーだった。
「私のデザインなのよ。消したくないわ。前にも言ったじゃない……」
「でも、何かの時に誰かの目に付いたらさ……」
「気にする人なんていないと思う」
「そうかな……」

夫はタトゥーが気に入らないのではなく、彫った男の事が気に入らないのだと思う。若い頃の恋は無邪気なもので、相手の将来性や背景など考慮せず、ただ好きだから好き、と夢中でいられた。
早い話、見た目が好みで付き合っていて楽しければ、それで十分なのだ。

私の腰にタトゥーを彫った彼が、そんな男だった。
明るく軽薄で新しいもの好きな、可愛い人だった。

彼は二十歳ぐらいの頃、友達と遊びに行ったオーストラリアで開放感に浮かれたのか、左の二の腕にマオリ族の伝統的デザインのタトゥーを入れて帰ってきたのだが、それ以来タトゥーが気に入ったらしく、日本でもタトゥーのサロンに出掛けて行っては、体のあちこちに小さなシンボルやモチーフを増やしていった。そしてその内、自分でも彫ってみたくなったらしく、タトゥーの器械や顔料を買い込み、自分の体でタトゥーの練習をするようになったのだ。しかし、自分の身体に彫るのには限界が有るのだろう。彼は私の身体を練習台に使いたがった。

「マーサの肌は白くてキレイだから、すごく墨が映えると思うんだよ。服の下に隠れる所ならいいだろ？小さいのでいいから彫らせて欲しいんだ」
日本画専攻の彼の描画センスは良かったし、タトゥーの技術も見る見るうちに上達しているのは知っていたが、痛そうなのに加えて、一度入れたら簡単に消せないタトゥーを自分の身体に刻むのは嫌で、私はずっと彼の頼みを断っていた。

ある日、彼が私の部屋に遊びに来ていた時の事、彼はベッドにもたれて床に座り、私のスケッチブックを開いて眺めていた。私が飲み物を乗せたトレイを持って彼の横に座ると、彼は私にスケッチブックの一点を指差して見せた。
「この妖精いいね。これ、入れてみない？」
それは私が銅版画のモチーフの為に描いていたもので、まだ胸のふくらみも無い五、六歳の裸の妖精が、モンシロチョウの羽を付けて、ふわりと空中に浮いている鉛筆書きのスケッチだった。

「入れるって、タトゥーの事？」
「そう。いいよ、この線、タトゥー向きだ。このサイズなら腰か肩に入れたいところだけど、どう？」
まだ諦めていなかったのかと呆れたが、私の描いた妖精が、私の身体に刻まれるのかと思うと、少しだけ興味を引かれた。私がスケッチを見つめて黙っていると、彼が説得を始めた。

「線画だけなら、そんなに目立たないぞ。あ、肩じゃなくて腰にすればいい。服、脱がない限り分からない所がいいよな。小さいからあんまり時間も掛からないし、いいと思うな、この妖精」
私が、うーん、と口ごもっていると、彼は私の腰に腕を廻して抱き寄せ、首筋に唇を押し付けた。
「いいよな？これ、ペン画に起こしておいて。俺、マーサの絵に忠実に彫るからさ」
結局、私は折れた。

週末、私は彼の部屋にスケッチブックを持って訪れ、彼は私の小さな妖精を、私の腰の上に正確に再現した。彼がデジカメで撮ってくれたタトゥーの画像を、彼と一緒にベッドに寝そべって眺めながら、嬉しくて笑った事を昨日の事のように思い出せる。
私達は、若くて愚かで幸せだった。
あまり長くは続かなかったけれど。

彼にタトゥーを彫って貰ったのは、私達が付き合って一年ほど経った頃だった。同じ頃、彼は安い中古車を手に入れ、私達は天気が良いと目的も定めずドライブに出掛けた。

そして運命の日が訪れた。人生で最悪のドライブ。
あの事故に彼の責任は無かった。前を走っていた車が追い越しに失敗してハンドル操作を誤り、中央分離帯にぶつかって跳ね返り私達の車に突っ込んできたのだ。避ける手立てなど無かった。あっと思った時には、横ざまになった車の鼻先がこっちに飛び込んできて、胸が潰れるような衝撃を受けた後、顔面に鈍痛を感じ意識が飛んだ。彼の買った年式の古いセダンには、運転席にしかエアバックが付いていなかった。

私達は事故に巻き込まれた、運の悪いカップルだったのだ。あの事故で彼も鼻の骨と肋骨を折る大怪我をしたが、私は顔面が砕けるほどのひどい状態だと聞くと、責任の重さに怖くなったのか、後の事は保険会社と弁護士と両親に任せ、退院した途端に逃げるように実家に帰った。
私は彼の不人情さに怒り、悲しんだ。その一方で、逢いたくてたまらない気持ちと、この顔を見られたくない気持に苦しんだが、一年ほど経って、やっと諦めがついた。
可愛いけれど、絶望した私と向き合う度胸の無い、弱い男だったわけだ。

結婚してからは、もう流石に彼のことを思い出すことは無い。
彼の事は、もう恨んでもいないし会いたくもないが、彼が彫ったこの腰の妖精は、私の青春が最高に輝いていた頃の大事な思い出なのだ。だから、このタトゥーは消したくない。夫が彼の事を何となく見下しているのを知っているけれど、この妖精は私のもので、彼のものではない。彼や夫や、他の大切な人達がいつか私の元から去ったとしても、この可愛らしい裸の妖精は私と共に生きて行くのだ。ずっと、私の命がある限り。

二年前に自費出版した「海の底の蝶の夢」は、学生時代に授業の一環で作成した作品をまとめたもので、無気力にただ日を送っている私を励まそうと、母が私に薦め費用を出してくれた。母のアイディアは功を奏して、私は作品集を作る事に生きる希望を見出し、その為に外に出て人に会う事もした。
もう少し後だったら、私にアプローチしていた今の夫である生方秀一が、もっと凝った本を作れるだけの費用を負担してくれたかもしれないのに、と時々可笑しく思う。今は費用については心配ない。問題は私の作品の出来だ。あの作品より、もっと心に響くものを創りたい。

私は隣で寝息を立てている夫の背中を見つめる。私はこの人を利用しているだけなのだろうか？　それとも、これが共存共栄と言うものだろうか。どこの夫婦も、こんなものなのだろうか……。

　月曜日、夫を仕事に送り出してから、やっと私は篠田さんから借りた本を読むことが出来た。大分読みこまれたらしいくたびれた本ではあったが、篠田さんが言った通り、とても読みやすく分かりやすい内容だった。
　読んでいるうちに、製本のみならず装幀も自分でやってみたい気持ちになったが、自分のすべきことは銅版画の方なのだから、やはり装幀は篠田さんにお任せする方がいいと思い直した。

銅版画で表現する物語。アイディアは無いわけではないが、まだ構想としてまとまってはいない。
私は居間のテーブルに自分の創作ノートや大判のメモパッドなどを広げて、取りあえず思いつく事をどんどん書き出す事にした。まずは物語を作って、それに合った絵を描き、銅版画に仕上げる。ここが一番大事だわ。この後は、刷ったものに詞書を入れ、目次、後書きを入れる。ここまで出来たら、篠田さんに相談して製本、装幀をしてもらおう。

「今年中に終わるかしらねぇ…」
ダラダラ手を付けていると、いつ出来上がるか分からないので、私はノートにざっと目標の期日を記す事にした。今週中に物語の筋を決め、版画のラフ案を描く事。私はこのメモに、赤いサインペンで期日の日付を書き足した。しばらく創作から離れていたので、プレス機やインクのチェックもしておこう。多分腕も落ちているから、線の引き方だけでも今のうちから練習しておこうか……。

いつもの静かで退屈な午前中が、急に慌ただしく焦れたように感じる。これはきっと良い傾向なのだわ。私は、枯れかけた自分の身体の中に清らかな水がひたひたと流れ込み、ゆっくりと芯から潤ってゆくような、満たされた感覚を味わっていた。長くかかったけれど、漸く私は自分自身を取り戻す切っ掛けを掴めたのだと思う。
私はメモパッドに思い付くまま、言葉ではなく絵を書き始めた。先に絵を描こう。そこから物語は自ずと産まれる。私は小説家ではなく、絵描きなのだから……。

前の本のような少女趣味なファンタジーではなく、もっと人の心の深淵まで覗くような、そう、人の見たくない醜悪さや狡猾さまでも表現し、かつ美しいと思えるものを描きたいのだ。私の作ろうとしている作品は、もしかしたら自分と篠田さんしか目にしないままに、誰にも知られずこの世から消えるものの一つになるかもしれない。それでもいいと思う。その為だけに創るとしても、私にとって十分な価値が有る。

その日から私は、いつも手元にノートやスケッチブックを置いて、家事の合間に絵を書いたり、文章を書き連ねたりして構想を練った。なかなか考えがまとまらず、食事の後などもぼんやりしている様子に、夫が少し不審に思ったらしい。
「最近、何だか上の空な顔している事が多いけど、どうしたの？」
「別に。ちょっと考え事」
慌ててテーブルの上の食器を片付ける。

「何か描いてるの？」
はっとして彼の顔を見た。
「どうして？」
「たまに手が鉛筆で汚れてるから」
夫が私の事をしっかり観察していた事に、ちょっとした疎ましさを感じたが、いずれ言わなければならない事なので、この機会に話す事にした。
「ええ……。そうなの、また版画の本を作りたいなって思って」
「自費出版の？」
「ううん。今度は、印刷じゃなく、自分で刷ったものを製本して装幀して貰うつもり」
「ああ、少数限定の私家版ってところか」

「まぁそんな感じね。まだ、何も手を付けてないけど……」
「いいんじゃない。出来たら僕にも見せてよ」
「ええ、勿論」

私は力なく微笑んで、食器を台所に片付けた。これでしばらくの間、私の手が鉛筆やインクで汚れようが、髪をひっ詰め、着古した服で家の中をウロウロしようが、彼は文句を言わないだろう。そして彼は、私家版に幾らかお金がかかる事も許してくれたわけだ。

夫は絵だとか、私の創るものに全く興味を持っていないが私には甘い。私はその事を有りがたいと思う一方で、自分一人では何も出来ない無力さを感じ悄然とした。

夏

日々、伝票やパソコンと向き合い、機械的に頭を回転させているうち、あっと言う間に一週間が過ぎる。土曜の朝、僕はゆっくり朝寝して十時すぎにベッドから出ると、トーストとコーヒーの簡単な朝食を済ませた。
夕べ、母宛の手紙をやっと書き上げ、出来上がったブックカバーと一緒に封筒に入れたので、後で中央郵便局に持って行こうと思う。それから、どうしようか。画材屋でも行くか。装幀に使うような物は置いていないが、美術書や普段馴染みのない画材や、凝った雑貨などを見るのが面白いので、僕は時々画材店や額縁店も覗きに行くのだ。
ぼんやりしているとすぐに午後になってしまうので、僕はシャワーを浴びるとすぐに出掛ける準備をした。

昼頃に外に出ると、真夏の太陽が高く輝きジリジリと露出している肌を焦がした。地下鉄に乗って中央郵便局に行き、ガラスの正面玄関をくぐると、ロビーに流れる冷気にホッと一息ついて顔の汗を拭った。郵便受付のカウンターで封筒を計量してもらい料金を支払っていると、後ろに並んだ女性がチラチラと僕の顔を覗き込もうとしている。何だろうと振り向くと、ショートカットの小柄な女性がパッと顔を輝かせて声をかけて来た。

「やっぱり篠田君だ！久しぶり！」
それは元同僚で営業部の宮下主任と結婚した女性だった。
「ああ、聡美ちゃんか。びっくりした」
彼女は夏らしいボーダーのカットソーに、ハーフパンツ、サンダルというラフな服装で、小さな段ボール箱を抱えている。その彼女の向こうに、手を繋いだ小さな男の子と女の子がいて、切手の飾られたショーケースにくっついて熱心に中を眺めていた。僕が場所を空けて下がると、彼女はカウンターに荷物を置いて係員に送料を計って貰った。

「チビちゃん達も一緒なんだ」
「まだ留守番は無理だからねー」
聡美ちゃんはいつも元気でハキハキしている。ふたつ年下だが、入社当時から歳の差を感じない、しっかりしたタイプだった。遊び人の宮下が彼女と付き合いだした時、こういうキチンとした明るい子の方が宮下にとってはいいのかもしれないと納得した覚えがある。
結婚してからも円満に暮らしているとばかり思っていたが、先日見聞きした宮下の行動を考えると、人の生活も内面も他人には伺い知れないものだなと思う。

聡美ちゃんは料金を払い終えると、ロビーに並んだ自販機を指し示した。
「ちょっと、冷たいものでも飲まない？」
「いいけど、子供達は？」
彼女は子供達を呼ぶと、一人ずつ自販機で飲みたい物を選ばせた。上の男の子は小学校に上がったばかりで、下の子は来年幼稚園に入るそうだ。初めて会う知らないおじさんに、ちょっと緊張している様子だったが、おとなしく缶ジュースを持って、丸テーブルを囲んで置いてある休憩用の椅子に座った。
僕達も缶コーヒーを買うと、そのプラスティック製の座り心地の悪い白い椅子に掛けた。

「友達に子供が出来たんで、ウチのチビ達のオモチャとかベビー服を送ってあげたんだ」
「そう。子供の成長って早いもんだよねぇ」
僕はリングプルを空けて貰い、両手で缶を持ってジュースを飲んでいる二人の子供達に話しかけてみた。
「君たち、全部飲みきれるかい？」
母親似の男の子は、うん、と力強く頷き、女の子は恥ずかしそうに母親の方に小さな体を寄せた。
「二人ともジュースなんかは全部飲むのよ。ご飯は、あんまり食べないのよねぇ」
聡美ちゃんは、娘の額の汗で張り付いた髪の毛を手で撫で付けて笑った。優しい幸せなお母さんらしい仕草で、見ている方も顔が緩む。

「篠田君は、まだ結婚しないの？」
久しぶりに人と会うと、いつもこの質問を投げかけられる。男がいつまでも結婚しないと、体か性癖に問題があるのではないかと勘ぐるのが世間一般の習いらしい。聡美ちゃんに悪意が無いのは分っているので腹は立たないが、自分にも答えようの無い質問をされるのには正直辟易する。

「未だ独り者だよ」
「独身主義ってわけじゃないよねぇ？」
「丁度いい相手が見つからなくてね」
「婚活すればいいのに。ちゃんと働いているし真面目だし、見た目だって悪くないんだから、お見合いすれば絶対ポイント高いタイプよ、篠田君は」
「それ恋愛向きじゃないって意味？　付き合うには、つまらなくて振られるタイプって事？」
「そんな意味じゃないけど。恋愛はともかくねぇ、結婚は面白ければいいってもんじゃないもの。安定している方がいいわ」
「まぁ、そうかもね」
彼女はちょっと物憂げな顔をして、コーヒーの缶を見つめた。
「会社も随分変わったみたいね。私がいた当時は、泊まり出張なんて殆ど無かったのに」

僕は彼女の言っている意味が分からなくて、一瞬ポカンとしてしまった。僕の職場はオフィス機器のリース販売を専らとしている会社の本社で、営業の出張は有るには有るが、日帰り程度の直行直帰が殆どで、泊まりで行く事はそう多くはない。地方は営業所や出張所の管轄なのだ。
経費節減がモットーとなっている今、残業も極力減らすよう上から号令が掛けられているし、泊まり出張なら、総務課の自分が知らないはずが無い。僕の返事が無いので、彼女は怪訝な顔で僕を見上げた。僕はその表情を見てハッとし、何とも曖昧な返事をした。

「この不景気だからね、ウチの会社も新規開拓しないと生き残れないから」
「そうなんだろうけど……。残業も増えて、何だかウチは母子家庭みたいよ。篠田君から営業部長に文句言っといて」
「分った、言っとく」
ニコッと笑った彼女の顔は化粧っ気も無く、目尻には歳相応のシワが寄った。小柄で元気な様子が彼女を年齢より若く見せているが、十年前と比べればさすがに老けた感じは否めない。

僕は長身でスレンダーな河原純の、今どきの若い女性らしいしなやかな肢体を思い浮かべた。宮下の誤魔化しは、きっと彼女と過ごす時間を作る為のものだろう。ちょっとしたきっかけで、すぐに壊れて露呈する浅はかな嘘だ。
宮下はこの家族を愛していると思う。それなら美しい部下に対する、あいつの気持ちは何だろう？　摩擦熱による一過性の浮気なのか、それともこの家族を捨てても良いと思うほど真剣なのか？僕は聡美ちゃんに本当の事は言えず、結果、宮下の嘘に加担したような嫌な気持ちになった。

「今日は宮下は？」
「車検でディーラーに車持っていったの。お陰でこの暑いのにバスで来たのよ」
「たまにはバスに乗るのも面白いんじゃない。ねぇ？　バスとか電車って面白いよね？」

子供達に話を振ると、二人はケラケラと楽しそうに笑った。子供達がジュースを飲み終わるのを待って、僕らは郵便局を後にした。彼女達は、これからデパートで催されているアニメのイベントに行くそうだ。

「篠田君、早くいい人見つけてね」
聡美ちゃんがそう言って手を振ると、子供達も僕に向かって大きく手を振った。
「紹介してよ。バイバイ」

僕は彼女達と別れて、街で一番大きい画材店に向かった。
宮下が彼女と付き合いだした頃、同期みんなで飲みに行く機会が多かった事もあり、僕も同期の女性社員の一人と何となく付き合っていた。
お互いこれという相手がいなかったし、嫌いなタイプではないから、付き合っているうちに異性として好きになるのではないかくらいの気持ちで、休みの日には宮下達と四人で遠出もした。僕達はそれなりの関係にはなったが、結局お互いに対して、それほどの情熱を持てなかったのではないかと思う。

ある日彼女から、他に好きな人が出来たので別れたいと切り出された時、僕は怒りも悲しみも感じず淡々と承諾した。僕は彼女に振られた、真面目が取り柄のつまらない男と社内でレッテルを貼られても一向構わず、はっきりとした恋愛感情も持てないまま、心や時間の隙間と体の欲求を満たす為だけに付き合っている彼女を、自分が傷付けずに別れられた事に安堵した。
程なく彼女は結婚して会社を辞め、僕は彼女の結婚式にも出席しているのだ。

――あれは、摩擦熱ですらなかった気がするなぁ……。
その後、何人かの女性と浅い付き合いを経験したが、どの人とも長続きしなかった。それは多分、僕の積極性が足りないせいだろう。自分の人生にその女性を踏み込ませ、また自分も彼女の人生に踏み込んでいく。そうする決意と覚悟を、どの女性に対しても僕は持てなかった。
そして、そういう逃げ腰を女性は鋭く嗅ぎ分ける。難しく考えすぎなのかもしれないが、これが僕の性分なのだから仕方が無い。ストイックなどと言う綺麗事はお門違いだが。

照りつける太陽の下、繁華な街の中を十分ほど歩くと、目指す画材店のビルが見えてきた。画材店と言っても、雑貨や文房具も充実している五階建てのビルで、地下にはカレーの店やコピーショップがテナントとして入っている。最上階にはギャラリーも備え付けられ、小ぎれいな喫茶店もあるので、僕のようなタイプなら何時間か過ごせる居心地の良い場所だ。
中に入ると、夏休みのせいか子供や若い女性で賑わっている。納涼コーナーに展示された、ガラスの江戸風鈴が涼し気な音を奏でていた。
僕はエスカレーターに乗って、三階の画材売り場へ向かった。紙売り場に行ってマーブル紙でも見ようかと商品棚を縫って歩いていると、すぐ近くの棚の前で画材を選んでいる女性に目が行った。

「真麻さん」
思わず声が出た。彼女は顔を上げ、声の主を探そうと周りを見回し僕の姿を認めた。
「あら、篠田さん。今日は」
微笑んだ彼女は先週とは違い、髪をアップにしてまとめ、半袖のブラウスにサブリナパンツ、ローファーというカジュアルな服装だった。今日はやけに知り合いに会う日だな、と奇妙に思いながら、僕は彼女の見ている棚の前まで行った。

「銅版画の材料ですか？」
「そうです。インクが足りなさそうなので。篠田さんもお買い物ですか？」
「ええ、特に買わなきゃいけないものはないんだけど」
真麻さんが見ていた商品の棚を見てみると、変わった形の版画の道具や、見たことの無いインクや溶剤の缶が並んでいた。

「へぇ、面白いね。この店には良く来るけど初めて見た」
「油絵なんかに比べたら、一般的じゃないですもんね。私がやっているのは、銅版画の中でもエッチングと言う技法なんですけど」
「ああ、聞いたことはあります。僕は良く知らないんだけど、インクにはカラーも有るんですね。黒一色なのかと思ってた」
「多色刷りも出来ますよ。私は線描が好きなので、色は使わないんですけど」

僕は真麻さんに偶然再会した事が、何だかとても嬉しくなった。
会社や仕事では話題に上がる事さえない、絵だの画材と言った、およそ生活に必要のない浮世離れした道楽についての会話を交わせるのが嬉しいのだ。
ふと、そこの棚を見るとビニール袋に入ったメッシュ状の布の束が置いてあった。寒冷紗だ。

「え、ここで寒冷紗、売ってるんだ」
僕は少し驚いて、その布を手に取った。
「インクを拭うのに使うんですよ。装幀にも使うんですか？」
「使いますよ。背側の補強に貼るんです、これ。僕は今までネットで買ってたんだけど、何だ、ここで買えばいいのか」
「私の家に山ほど有りますよ。言って頂ければ差し上げます」
「それは助かります」
真麻さんは夏の暑さを感じさせない涼しげな笑顔を返した。前に会った時と同じ、色白で人形のように静かに笑う人だ。

「ちょっと、これ買ってきますね」
真麻さんはインクの缶を一つ持ってレジに向かった。僕も何となく、彼女の少し後ろに付いてレジカウンターの方まで移動し、彼女が精算をしている間、手持ち無沙汰に色鉛筆やパステルを眺めて待っていた。
待ってどうするのかとも思ったが、このまま別れてしまうのも何だか勿体無いような気がしたのだ。
精算が終わり彼女がこちらに歩いて来たので、取りあえず共通の話題である、彼女の本について聞いてみた。

「作品の方は進んでいますか？」
「大体の構想は出来たんですけど、なかなか進まなくて。篠田さんに何もご報告出来なくて申し訳ないです」
「いや、いいんですよ、僕は。あの……お時間有ったら、お茶でもどうですか？」
普段の僕なら、既婚の若い女性をお茶に誘うなど有り得ない行動なのだが、今日は宮下の妻の聡美ちゃんと話して少しお喋りをする事に弾みがついていたのと、真麻さんと作品の話をしたいのとで、思い切って言ってみたのだ。真麻さんはちょっと迷ったようだったが、腕時計を見て、一時間くらいなら大丈夫だと言った。

僕達はエレベーターで五階まで上がり、大きな窓ガラスから明るい日差しが差し込む瀟洒な喫茶店に入った。この店は、アート系の雰囲気作りの為か、壁には現代アートのパネルが幾つか飾られ、椅子や食器はシンプルながら個性的なデザインでまとめられている。美術雑誌も色々置かれていて、客層は美術系の学生や年配の趣味人が多く、みな静かに時間を過ごしている。
かすかに聞こえるクラシックの BGM が流れる中、グレーのシックなワンピースを来たウェイトレスが、落ち着いた声でいらっしゃいませと声を掛けてきた。僕達は日差しの強い窓側を避け、壁側の隅の席に着いた。ウェイトレスにアイスコーヒーとアイスティーを頼むと、真麻さんが微笑んで言った。

「私、隅っこの席、好きなんです」
「ああ、僕も。落ち着きますよね」
　真麻さんと話していると落ち着く。

若い女性と向い合って座っているのに、ワクワクするわけでも無ければ、どうしようかと焦るわけでも無い。それは彼女が既婚者だからというのも理由の一つだろう。
聡美ちゃんとフランクに話せるのも同じ理由からだ。恋愛や結婚の対象から外せば、女性と話すのは男性と話すより気楽で面白い事も多い。
後は彼女の人柄か。彼女の穏やかで優しい物腰は、僕の気持ちも穏やかにしてくれる。上品な容姿と、あの過激な銅版画は未だに結びつかないが。

僕達はしばらくの間、版画や絵について、取り留めのない話をした。そのうち僕は、彼女の動きの少ない人形のような笑顔にも、良く見れば微妙な陰影や表現がある事に気づいた。
僕は、その微かな違いを見極めようと、もしかすると必要以上に彼女の顔を見つめたのかもしれない。真麻さんは、ふと口をつぐみ僕に向かってこう言った

「私の顔って、何か変ですか？」
彼女の口調は今までと違って冷ややかで、僕は彼女の気分を害したかと思い、慌てて言い訳をした。
「いえいえ、変だなんて。あんまり色白で肌がキレイだからジロジロ見たかもしれませんね。済みません」
　真麻さんは、お愛想程度に口元を緩めて笑ったが、頬から目元にかけては悲しげで静かだ。そして、右手で自分の顔の右側をそっと隠した。

「私、この辺りの神経がまだ少し鈍いんです。気にするような事じゃないって言われますけど、やっぱりちょっと不自然ですよね」
僕は、彼女が学生時代に事故に遭った話を思い出してハッとした。
「……顔に怪我を？」
「そう、形成手術のお陰で、こうして外出も出来るようになりましたが、よく見ると傷跡が分かると思います」

そう言って細い指先でそっと自分の顔を撫でた。彼女の指の動きを追ってよくよく見れば、そこには僅かに細い切れ目のような筋が有ったが、パッと見で気付くようなものではない。
「傷なんて……言われなければ全然気が付かないし、真麻さんは美人ですよ」
「主人が治したんです。昔は美人なんて言われた事一度も無かったのに、変ですね」
薄く笑った彼女の顔は、能面の小面のように静かだったが、同時に水の底にでも沈んでいるかのように寂しげだった。
その様子を見て、若くて幸せなお金持ちの奥様と思っていた彼女が、人知れず苦しみや孤独を抱えて生きている事を感じたが、その冷え冷えとした彼女の孤独に引きずられまいと、僕はこと更何でも無いような口調で話を続けた。

「ご主人はお医者様なんですね。さぞかし名医なんでしょう。お世辞じゃなく、真麻さんはキレイですよ」
「前は私、もっと子どもっぽい顔だった…」
まるで今の自分の顔が気に入らないような言い方をする。
「若い頃は誰だってそうじゃない？　歳相応に落ち着いてキレイになったんだと思うな」
僕の言葉は通り一遍な慰めの言葉で、彼女はそんなセリフ聞き飽きていたのかもしれない。アイスティーを一口すすると、表情を明るく切り替えて僕に質問した。
「篠田さんはお独りのようですが、彼女さんは？」
いきなり矛先が僕に向いて戸惑ったが、彼女が明るい顔をしてくれたのでホッとした。
「全然ですね。僕みたいにインドアでオタク志向だと、女の人はつまらないでしょう？　歳も歳だし、半分諦めてます」
「そんな事ないですよ。篠田さんは、すごく話しやすいし清潔感があるから、女性ウケはいいと思いますよ」
「いい人なんだけどねーって良く言われます」
「ええ？　そんなぁ」

真麻さんは、さっきと打って変わって明るく笑った。若い女性らしい楽しげな笑顔だ。表情に一部硬いところは有るが、彼女が本当に面白そうに笑っているのが分かり、僕も少し気持ちが明るくなった。やはり女性は笑っている方がいいなと思う。
　僕達は小一時間ほど話して喫茶店を出、一階の正面玄関前で別れた。

「作品の下書きが出来たら、ページや構成の相談をしたいのでメールで連絡しますね」
「はい。楽しみに待ってます」
小さく会釈して去って行く彼女の背中を見送りながら、思ったより複雑な人生を送っている彼女に僕は今まで以上に興味を持ち、本当にまた会ってゆっくり話したいと感じていた。

傷

先週に続いて篠田さんと会うなんて、思いも寄らなかった。学生の頃は、しょっちゅう友人達とあの店に行って、買い物をしたりお茶を飲んだりしたものだけれど、そういう付き合いは絶えて久しい。やっぱり、好きなことについてお喋りするのは楽しいものだわ。

　でも、そんなに親しくもないのに、自分の顔の話なんかして、篠田さん、引いたんじゃないだろうか……。ちょっと迂闊だったかなとも思ったけれど、いっそ早い内に言ってしまった方が、自分を飾らずに素で話が出来ていいかもしれないと思い直した。
　同性の友人でもないのに、篠田さんとは自然体で話が出来て心地良い。昔の恋人は我が儘で喜怒哀楽が激しく、私は彼に嫌われないよう、機嫌を損ねないよう、いつも彼に合わせて自分を作っていたと思う。
　夫に対しては、労い感謝し、良き妻であろうと努力してきた。でも、篠田さんとは何の利害関係も無いせいか、学生時代のように気楽でニュートラルな自分でいられるんだわ。

いい人なんだけどねーって言われます、か。彼の言った言葉を思い出して笑みがこぼれる。そうね、確かに優しくて、人当たりのいい人。でも、ああいう職人肌の男性は、意外と頑固で他人を寄せ付けないものなのよ……。
さて、主人に頼まれた買い物をしないと。
私は照りつける夏の日差しを避けて、地下街へと潜った。

買い物を済ませて家へ帰ると、髪の中さえじっとりと濡れたように汗ばんで気持ちが悪い。冷蔵庫から冷たい麦茶を出してグラスに注ぎ、乾いた喉を潤したが、汗が止まらない。
たまらずシャワーを浴び、着替えて居間のテラス窓を全開にすると、吹き込んできた風は意外に涼しく、かすかに秋の兆しを感じた。窓の外に見える庭は、手入れもされない庭木や花々が雑草と入り交じって成長し、いかにも雑然としている。
ご近所から種が飛んで来たのか、植えた覚えのない立葵が一本勢い良く伸び、大きな赤紫の花を数個、誇らしげに咲かせていた。

生方の前の妻が、どうしても庭が欲しいと言うのでこの家の設計に盛り込んだそうだが、仕事で忙しい夫婦は手入れどころか庭を楽しむ余裕も無く、放っておくと暴力的なまでに広がる夏草と秋の落ち葉に辟易したらしい。
私は草木を嫌いではないので、ここに住み始めた時に何か植えようかとも思ったのだが、生方と前の妻が相談して作ったこの家の何かを、自分が勝手にいじるのに気が引け、結局雑草取りと掃除以外は手を付けないままになっている。もう結婚して二年が経つけれど、どこか私は馴染めないでいるのだ。この家にも、生方にも……。

十六歳違いの夫は、私の主治医でもあり私の保護者で、私のパトロンだ。寛容で頼りになる大人の男で、世間的には玉の輿に乗ったのだろう。一緒にいれば情が移ると言うのは本当だけれど、でもそれ以上の関係になる気がしない。
努力すれば行動や思考はコントロール出来るけれど、感情や心なんて努力では変えられないのだ。

――子供でも出来れば変わるのかな……。

私は全開にした窓を半分ほどに閉め、気持ちを切り替えて手を動かす事にしようと、作業用に空けてもらった八畳ほどの洋室へ移動した。
この部屋は、生方の元妻が自分の仕事用に使っていた部屋なのだが、彼女が自分のお気入りの家具を全て持って行った為、私が来た時はガランとした空室で、返って私には有りがたかった。私はここに、作業台とデスク、書棚、パソコンなどを実家から持ち込んだ。夫は新しいのを買ってあげると言ってくれたが、私は使い慣れたものがいいと、慎ましくも貧乏臭い学生時代の道具と一緒に嫁入りしたのだった。

こもった空気を入れ替える為、ここの窓も大きく開けると、爽やかな風が濡れた髪を通り抜けて涼しい。私はデスクの前に座ってスケッチブックを広げた。既にざっとではあるが十六枚のラフデザインが鉛筆で描かれている。これを情景が分かるように、もう少し丁寧に起こしたものを篠田さんに見てもらおう。画像をメールで添付するか、ファックスで送るか、また、どこかで直接お会いするかしないとね。

私は、ここ二三日、パソコンのメールチェックをしていない事をふいに思い出した。篠田さんからメールは来ていないと思うけど、念の為、今の内に確認しておこうと、デスクの上のノートパソコンに手を伸ばし電源を入れた。起動してからメールソフトを立ち上げると、すぐに数件のメールが受信ボックスに読み込まれて行く。殆どが通販などで利用したサイトの営業メールだったが、一件だけ個人の名前のメールが届いていた。
谷崎浩平
私はその送り主の名前を見て、凍りついた。
大学時代の恋人、あの彼の名前だったからだ。

どうしよう。どうしよう。とても読めない。突然メールなんか送られても読めるわけがない！

私は件名も見ずにメールソフトを閉じた。
パソコンの前から立ち上がり、理由もなく部屋の中をグルグルと歩きまわった。頭は何も考えられず、胸の中では何かが飛び跳ねて喉から飛び出してきそうなくらい、私は狼狽えていた。
どうして今頃になって連絡を寄こすの？！何を書いてきたの？謝罪なの？ご機嫌伺いなの？それとも、何事も無かったように自分の近況報告？どうして？どうして？

叫び出したいくらいの感情の乱れに我慢出来ず、私はパソコンをそのままにして作業部屋を出た。
居間の大きなソファに丸くなって座り込むと、胸が苦しくなり、クッションを抱いて私はメソメソと泣き出した。声は出なかった。ただ、ダラダラと涙が頬を伝った。

どうして泣いているのか、自分でも分からなかった。胎児のように丸くなって、どれくらい泣いていたのか、気づいたら陽は傾き窓の外には薄暗い闇が迫っている。私はゆっくり体を起こすと、ティッシュを取って鼻をかみ、しばらく呆然とした後でようやく立ち上がった。

――食事の支度をしなければ。
生乾きのまま、変な癖がついた髪の毛を手櫛で整え、私は台所に行ってエプロンを着けた。
――今日は、見ない。今日は、あのメールは読まない……。

ぼんやりとそう決めて、私は冷蔵庫の中から食材を取り出し料理を始めた。
夫が帰って来た頃には私も落ち着き、何事も無かった顔をして夫と食事を共にし、たわい無い会話をしながら二人でテレビを見た。心の中は、まだざわざわして落ち着かなかったが、メールの事は考えたくなかった。

当初考えていた予定通りに、作品のラフ案は出来そうにない。篠田さんには悪いが、もうしばらく時間を貰おうと思う。私は夫に、夏風邪気味で体調が悪いと嘘を吐き、寝室ではなく普段は使わない客間で一人寝することにした。

まだ時間は早かったが、私は早々にパジャマに着替え、畳に布団を敷いて潜り込んだ。たまに誰もいない和室で寝るのもいいなと、まだ新しい畳の匂いを感じながら思った。灯りを消して白い天井を眺めていると、何年も前の、彼と過ごした日々が思い出される。
あの人は、自由で我が儘で明るい可愛い人だった。突然思い付いたことをすぐに実行に移す子供っぽさは、馬鹿みたいでもあり羨ましくもあった。

私の銅版画のテーマを、もっと女っぽく官能的なものにしろと勧めたのも彼だ。少女趣味なファンタジー路線の女性作家なんて、幾らでも後から出てくるのだから、もっと印象的な絵を創れとも言った。そういう自分は、次から次と変わったものに手を出し、行き着いたのがタトゥーだったのには、首を傾げたけど……。

私達が別れたのを知った友人達も私に気を使ったのだろう。彼が実家に戻ってからどうしているのかは誰も教えてくれなかったけれど、あんな人が普通のサラリーマンに落ち着くとは思えない。
彼が今何をしているか、正直興味はある。事故にあってから、もう五年、心身共にメチャクチャな状態だった私を放り出して姿をくらませた彼に、私から連絡を取るなんて絶対に嫌だった。

メールは明日読もう。そして、返事はすぐに書かずにしばらく置いておこう。どうせなら、少し焦らせて苦しませたい。私は昔の悲しみや怒りを思い出して胸が詰まり、またしばらく布団の中でメソメソと泣いた。せっかく早めに布団に入ったのに、結局その晩は興奮して寝付かれず、朝方になってやっと浅い眠りに落ちたのだった。

次の日も夫が家にいた為、私は落ち着いてメールを読む気になれず、重苦しい鉛色の雲を胸の中に飲み込んだような気持ちで週末を過ごした。
そして月曜日の午後、私は作業部屋のパソコンの前に座り、覚悟を決めて谷崎浩平からのメールを開いた。

真麻さま
お久しぶりです。
このメールアドレスが生きているかどうか分からないけれど、連絡が取れる事を祈ってメールを書いています。
僕からの突然のメールに、きっと驚いたよね？
事故の後、顔を見せることもなく実家へ帰り、連絡を絶った僕の事を、君は怒っているだろうし、許してくれないと思う。今更、許してくれとは言わないけど、謝罪させて下さい。

僕は、君に負わせた運命の重さを分かち合う事もせず、一人で逃げ出した卑怯者です。君をたくさん傷つけ苦しませたことを、ここ何年も後悔してきました。本当に申し訳ないことをしました。御免なさい。
何度も君に連絡を取ろうと思ったのですが、結局その勇気を持てないまま年月が過ぎ、最近になって、人伝に君の手術が成功した事と結婚した事を知りました。今は生方真麻さんなんですね。

君が昔と変わらず美しく、幸せに暮らしている事を聞き、卑怯者の恥の上塗りですが、この機会にきちんと謝りたいと思った次第です。救いようの無い馬鹿と笑ってくれても構いませんが、心から謝りたいと思っているのは本当です。

ネットで君の銅版画のサイトも見ましたよ。マーサと言うハンドルネームと画風で、君のサイトだとすぐに分った。結婚しても創作を続けているようで安心しました。僕は君の才能を信じています。
何年も音信不通にしていたのに、図々しい事を言うと思うだろうけれど、図々しいついでにお願いがあります。

一度、直接会って話したいと思うんだけど、どうだろうか？
やっぱり、嫌かな？　嫌なら、無理強いはしないけれど、出来ることなら本当に一度会いたいです。
考えてみて下さい。返事はいつでもいいです。明日でも来年でも。
それではお元気で。
谷崎浩平

私は、ざっと目を通すとすぐにメールを閉じ、机に突っ伏して呻き声を上げた。気持ちとしては絶叫したいくらいだったが、実際には呻くぐらいがせいぜいだったのだ。
謝罪されるのはいい。それだけなら、数日掛けて当たり障りの無い大人の返事を書き送り、それで終わりに出来るのに、会いたいだなんて、どういうつもりなんだろう。

彼からのメールは、彼らしく直截で嫌なものでは無かったが、私の胸の内に垂れ込める鉛色の雲は、一層その重さを増して私の心を圧迫した。

　私は、彼の事をもう好きじゃない。好きじゃない。なのに、どうしてこうも心が揺さぶられるのだろう……。返事は書かなくてもいいのかもしれない。そんな義理も義務も無いのだし……。
　でも何か一言、言ってやりたいとも思う。恨み言でも嫌味でも、何か言ってやらないと、私の中で彼との決着がつかない気がするのだ。

　でも今はダメだわ……まだ気持ちが動揺して、何を言えばいいのかが分からない。まして会うだなんて、とんでもない！　しばらく、このまま放っておこう……読み直すのも嫌だ。

私はソフトを終了させて、パソコンの電源も落とした。気持ちを切り替えようと、作品のラフデザインを描いてあるスケッチブックを開いたが、描いてあるものは目を素通りするだけで、頭にも心にも届かなかった。
「上の空ね……」

スケッチブックを閉じてため息をつく。私の肌はじっとりと汗ばんで、首の辺りがベタベタして気持ちが悪かった。私はひとまずシャワーでも浴びようと、寝室に行って着替えを持ってから浴室へ向かった。
服を脱いで、ぬるめのシャワーを頭から浴びると、ざわざわと騒いでいた胸の内も次第に凪いで落ち着きだす。私はバスタブの縁に座ってうつむき、滝の下にでもいるかのように、しばらくの間、頭からシャワーを浴び続けた。

浴室から出て体をバスタオルで拭きながら、壁に貼ってある大型の姿見に映る自分の体をチラリと見る。この大型の姿見も、生方の前の妻の好みなのだ。この家には、至る所に他の女の主義主張が見て取れる。私と全く趣味の違う女の主張が。姿見に背を向けた時、腰の上の妖精がバスタオルの隙間から顔を出した。

――可愛い子……。
姿見に近づき、妖精のタトゥーを久しぶりにじっと眺める。
この妖精を、生方は消したいのよね。
その時、私は想像した。

私の妖精を生方が皮膚ごと剥ぎ、その皮で篠田さんに本を装幀して貰い、浩平にプレゼントするの。
私は暗くおぞましい、その物語が可笑しくて、鏡の前で一人微笑んだ。鏡に映った顔は、相変わらず心の空ろな人形の笑顔だった。
私は鏡から顔を背け、慌ただしく着替えて浴室を後にした。

宮下

「篠田係長、最近何だか明るいですよね。何かいい事あったんスか？」
月曜日、いつものように仕事をしていると、部下の武田誠が話しかけてきた。
彼は二十代半ばで、スーツ姿が何となくだらしなく、長めの髪の毛先をワックスであっちこっちに散らし、退社時刻が近づくとソワソワしてその毛先をいじりだす、調子のいい今どきの若者だ。

「そうかぁ？　特に何も無いけどね。いつも通りだよ」
「ホントっすかぁ？　彼女でも出来たのかなって期待したのに」
僕は彼が回してきた伝票のチェックの手を止めて、彼の顔を見た。
「何の期待だよ？　僕に彼女が出来ると、君にいい事でも有るのか？」
「へへっ。風が吹けば桶屋が儲かるんですよ。バタフライ・エフェクトってやつですよ？」
「はぁ？　何の話だよ？」

伝票に検印を押して返すと、彼は目に掛かりそうな前髪を右手で払い、声を落とした。
「社内で独身彼女無しの男が減った方が、僕にもチャンスが回ってくる可能性高まるでしょ？」
僕は話のバカバカしさにため息を吐いた。
「呆れたね。誰か狙ってる子でもいるのか？」
「それは内緒です」

にやりと笑うと、スイと椅子を戻して自分のデスクに収まった。要するに、僕に早く片付いてくれって事か。昔の女子社員じゃあるまいし。
ただ、彼の言うことに思い当たるフシが無いでもない。実際、この数週間、僕はとても充実した気持ちで日常を送っている気がする。それの原因は、やはり真麻さんと知り合った事だ。
彼女の本を装幀する事を考えると、僕の胸の奥にエネルギーの塊のようなものがムクムクと沸き上がり輝き始める。それは、とても幸せな感覚だった。
恋愛とはちょっと違うけれど、この幸せな感覚が、平凡で代わり映えのしない日常を明るく楽しむ原動力になっているのだと思う。真麻さんは、僕のミューズなのかもしれない……。

この日、僕は週末に郵便局で宮下の妻と会った事をすっかり忘れていた。昼休みに、宮下に話しかけられるまでは。
午前の仕事が終わり、何を食べようかと考えながらオフィスのドアを出ると、後ろから声を掛けられた。振り向くと、営業部の宮下主任がスーツのジャケットを片手に小走りに追いかけて来た。

「篠田係長、昼飯、一緒にどう？」
「ああ、いいよ。何処行く？」
彼の汗ばんだ顔を見て、ああ、そう言えば土曜日に聡美ちゃんに会ったなと、思い出したのだった。
「蕎麦屋は？今、行けば小上がりに座れる」

僕は宮下の提案に賛成し、連れ立って近所にある割と大きな蕎麦屋の暖簾をくぐった。紺絣の作務衣を着

た若いバイトの女の子に、希望通り小上がりへ案内してもらい、薄い座布団に座って膝を崩すと、天井に備え付けられた古い扇風機の風が顔に当たり心地良い。

男二人だと注文も早い。天ぷら付きのざる蕎麦を二つ頼むと、すぐに別の女の子が冷たいオシボリと冷茶を持って来てくれた。テーブルを挟んで向かいに座った宮下は、早速ネクタイを緩め、冷たいオシボリで顔を拭いた。

「若い頃は、オシボリで顔を拭くようなおっさんになりたくないって思っていたが、こう油ぎっちゃぁ拭かないわけにはいかねぇよな」
「脇の下まで拭くなよ」
「そこまでしねぇよ。店に迷惑だろ」

宮下は使い終わったオシボリを無造作に丸めてテーブルの隅に置くと、冷茶を一口飲んで少し真顔になった。
「聡美に会ったんだって？」
「ああ、郵便局で偶然。子供達、大きくなったよな」
「段々生意気になってくるわ。その内、お父さんくさーい、とか言い出すんだろ」
「二人共いい子にしてたぞ」
宮下は頬杖をつくと、僕の後ろに有る窓の方を見て、ぼんやりと言った。

「あいつ、何か言った？」
「あいつ」とは聡美ちゃんの事なんだろうと察しつつも、何をどう言ったものか一瞬考えたが、聞いた話しをそのまま伝える事にした。
「出張や残業が増えて、まるで母子家庭だって言ってた」
宮下は目を瞑り、手の平で額の辺りを撫でながら、ふーん、と生返事をした。
お待たせ致しましたー、と元気な声がして、作務衣の女の子が蕎麦の乗った黒塗りの盆を二つ掲げてテーブルに置いた。僕達は話しを止めて、熱々の天ぷらと冷たい蕎麦を食べだした。

「ビール飲みてぇー」
片肘付いて蕎麦を食べる宮下は、若干顔が丸くなり胴回りも太くなったものの、表情と乗りの良さには昔と同じ稚気があり、若い女に人気が有るのも頷ける。
「聡美がさぁ……」
「うん？」
「篠田君は見た目が若い。全然昔と変わってなくてびっくりしたって言ってたぞ」
「そうか？　歳相応に順調に老けてるよ」
宮下が食べる手を止め、僕の身体を見回す。

「お前、体型、十年来変わってないだろ？」
「それはまぁ、そうだけど」
確かに僕は二十代の頃と、体型も体重も殆ど変化が無い。大昔に買ったスーツを今でも着られるのは、ちょっとした利点だ。
「圭介はいいよな。自由で」
天ぷらをつまみながら、宮下は昔のように僕の事を下の名前で呼んだ。それを聞いて、僕は彼のプライベートにもう少し踏み込んでもいいのかなと思った。

「お前んとこ……大丈夫なの？　嘘はいつかばれるぞ」
「そうだよなぁ……」
それだけ言うと、宮下は蕎麦と天ぷらを黙々と口に運んだ。天ぷらも蕎麦も旨かったが、今ひとつ味を楽

しむ事が出来ず、僕もまた黙って食事を続けたのだった。蕎麦を食べ終わる頃、店の女の子が蕎麦湯と冷茶のお代わりを持って来てくれたので、それをチビチビ飲みながら時間を潰していると、宮下がふいに顔を歪めて口を開いた。

「別れるって面倒臭いよなぁ……」
僕はギョッとしたが、周りに社内の人間がいない事を確認してから尋ねた。
「離婚するつもりか？」
「違うよ、女の方だよ」
「ああ、あっちの方……」
「可愛いんだけどさぁ、振り回されるのに疲れてきた」
「勝手な事言うなよ」
「誰か、他の男に乗り換えてくれないもんだろか？」
罪悪感の欠片も無い宮下の考えの軽さに、僕はほとほと呆れ果ててしまった。

「遊びたい時だけ遊んで、飽きたから誰かにくれてやりたいなんて、何処のヒヒオヤジだよ。別れたいなら誠実に対応しないと、仕事にも支障が出るだろ？」
あっちだって納得ずくなんだから、誠実も何もねぇよ。アレは別に俺に惚れてるわけじゃないと思うな。ただ、チヤホヤされていい思いが出来れば、それで満足なタイプなんだよ」
「噂では、お前にかなりご執心って話だけどな」
「イチャイチャするのが好きな女なんだ。あれには俺も参るわ。とは言っても、初めはそれが良かったんだけど」

宮下が日に焼けた顔を皮肉っぽく歪めて笑った。
「お前が引き受けてくれればいいのにな。独身だし、彼女もいないんだろ？」
「生憎だけど、僕は彼女の好みじゃないらしいし、社内恋愛は懲りてるからお断りだ」
「ああ……なんか、そんな事も有ったな」
店の入口辺りがドヤドヤと騒がしくなったので、そちらに目を向けると、営業部長が部下を何人か引き連れて入って来るのが見えた。

「やっべぇ、出ようぜ」
宮下がジャケットと伝票を掴んで立ち上がったので、僕も一緒に立ち上がり小上がりを下りた。レジで支払いを済ませていると、背中越しに部長達が小上がりへ向かうのが見えたが、僕らはそそくさと店を後にした。
「捕まると説教されて、うるさいからな」
「聡美ちゃんに、残業と出張を減らせと部長に言っとけって頼まれてたんだった」
「ああ……心配しなくても、もう出張はねぇよ」
「じゃあ、あの子とは手を切るんだな」
「うん、もう潮時だと思う」

ブラブラ歩いているうちに会社のビルに着いてしまったが、宮下は玄関脇にある喫煙ルームへ行くと言うので、そこで僕らは別れた。
思えば蕎麦屋の中で、あいつは煙草を吸うのを我慢していたのだろう。蕎麦屋は禁煙ではないので、煙草を吸わない僕への気配りだったのかもしれない。そんな細かい気配りが出来るくせに、どうして女に対しては、ああも無神経なのだろう？　そんな男が女にモテるのが、恋愛の妙と言ったところか。

エレベーターに乗り会社のオフィスに入ると、昼休みの節電の為に照明を落としていて、全体が薄暗い。まだ昼休みは二十分ほど残っているが、何人かの職員は、その暗い中で既に仕事を始めている。大抵は年配の男性だ。仕事が溜まっていると言うより、休み時間を持て余している感じがする。

僕もあの歳になるまで、ここで働き続けるのだろうか。もし、今仕事を辞めて、二十四時間好きなことをしていい状態になったら、僕は何をするだろう？　装幀の勉強をしに留学するか？　それとも誰かに師事するのではなく、自分のスタイルを確立する為に研鑽すべきか？　装幀を仕事にする以外に、したい事は無いのか？
　僕は薄暗いオフィスの自分の席に座って、ぼんやりと自分の人生について考えた。
独りは気楽で自由だ。誰かに対する責任を持たず、自分の事だけ面倒を見ればいいのだから、多少のリスクは怖くない。しかし、宮下の家族を見ると、ああいう普通の家庭を羨ましいとも思う。
まぁ、どんな生活でも百点満点なんて事は無いのだが。
そう言えば真麻さんのところも、何となく幸せではないような、妙な言い方をしてたよな。彼女の顔を修復した医者が、今のご主人だとか……。

「あれ、篠田係長、お戻りが早いっすね」
気が付かなかったが、すぐ側に部下の武田が立っていた。廊下の自販機で買ったのか、両手にドリンクのペットボトルを持っている。
「武田君、二本もまとめ買い？」
「いえ、僕お茶を買おうとして、間違えてコーヒー買っちゃったんっすよ。コーヒー飲むと、お腹ゆるくなるんでお茶を買い直したんです」
「へぇー、買おうか？　そのコーヒー」
「え？　いいんすか？嬉しー、それじゃ百五十円で」
「君、今日一番の笑顔だね」

彼は実に嬉しそうに僕から小銭を受け取ると、恭しくコーヒーのペットボトルを渡してくれた。
「そう言えば、篠田係長って営業の宮下主任と同期なんですよね？」
「そうだけど、何で？」
武田は僕の隣の椅子に座り、頭を低くして小声で言った。
「河原さんと出来てるって、ほんとっすかね？」

もうこいつの耳にも入っているのかと驚いたが、僕は知らん顔してペットボトルのキャップを開けた。
「変なこと言うなよ。彼女、同い年の彼氏がいるって聞いてるけど？」
「あ、その男とは別れたみたいです。やっぱり、ただの噂なのかなぁ」
彼もお茶のペットボトルのキャップを開けて一口飲んだが、何だか顔がニヤついている。
「ははぁ、君は彼女に気があるんだ？」
「いやいやいやぁ、そんなんじゃないっすよォ」
分かりやすい男で、手の平をバタバタと横に振る顔が嬉しそうだ。

「別れた後ならチャンスかもしれないぞ。彼女、徹底的にチヤホヤして可愛がってくれる男が好みらしい」
「うわぁ、ハードル高そうっすねぇ。金も掛かりそうだし」
「まぁ、せいぜい頑張れよ。社内恋愛は壊れた時に、ちょっとしんどいけどな。皆んなすぐ忘れるから気にするな」
「失恋前提で言いましたね」

「若いの集めて合コンでもやったらいいじゃないか。夏なんだからビヤガーデンでも行って来いよ」
「ああ、いいっすねぇ、ビヤガーデン。係長も一緒に行きましょうよ」
「やだね。君達と飲みに行ったら、財布ごとむしり取られそうだ」
「あはは、ちょっとだけ多めに払って頂ければ結構です」
「遠慮するよ」
髪の毛をいじりながらお茶を飲む、彼の平板な横顔を見ていると、残念ながら河原嬢の好みではないと思うが、宮下と彼の家族の為にも、武田君にはちょっと頑張って貰いたい気持ちになった。

仕事が終わって家に着くまでの間、地下鉄に乗っている時、近所のスーパーで買い物をしている時、僕は昼間の宮下との会話を反芻していた。
――誰か、他の男に乗り換えてくれないもんだろか。
狡いセリフだが、良く考えてみれば僕だって口にこそしなかったものの、胸の内でそう考えた経験は有る。誰でも、人を傷付け自分が悪役になるのは嫌なものだ。
手を切りたい時に、向こうの都合で別れてくれるなら、渡りに船で二つ返事だろう。河原さんには悪いけれど、宮下は彼女ときれいに別れ、家族と穏やかで幸せな暮らしを続けて欲しいと願う。河原さんは若くて美人なんだから、これからいくらでもチャンスが有るだろう。何も妻子持ちの中年男に人生を掛ける必要は無いじゃないか。
彼女が宮下の事をすんなり諦めてくれればいいけれど、と考えながら僕は自宅のドアの鍵を開けた。

部屋の窓を開けて風を通し、日中に溜まった暑さを追い出すと、僕はコーヒーを落としながら、スーパーで買ってきた弁当をレンジで温めて簡単な食事の用意をした。
夏場に台所に立つのは暑いし、作った物も傷みやすいので出来合いで済ませる事が増える。食卓の椅子に座ってコーヒーが落ちるのを待っていると電話が鳴った。これは母親だなと思って受話器を取ると、案の定母からの電話で、こちらの様子も聞かずに勢い良くブックカバーが届いた報告を始めた。

「あれ、着いたわ、ブックカバー。ねぇ、いいわ、あれ。二枚も作れたんだねぇ。一枚はね、ケイコおばちゃんに上げるわ。また、いい生地見つけたら送るから頼むね」
「うん。そんな手間じゃないからいいよ」
「いい歳した息子がミシンで縫ったなんて、何だか可笑しいけど、まぁいいわ、オシャレだわ。あんた、ご飯食べたの？」
「いや、これから」
「あ、そう。作るの？」
「いや、弁当買ってきた」
「あー、スーパーの弁当かい？　便利だけど味噌汁くらい作りなさいよ。それより、作ってくれる人見つけなさいよ。それじゃね」
「ああ」

　一方的に言いたい事だけ言って切るのは相変わらずだが、こちらから話題を振る必要が無いので楽と言えば楽だ。受話器を置くと丁度コーヒーが出来上がったので、マグカップに注いで食事にした。
　母が元気な内に落ち着いて安心させたい気持ちは有るが、こればっかりは今の自分には無理そうだ。聡美ちゃんにも婚活を薦められたが、自分がこれからどう生きるべきか定まらない状態で誰かに責任を持つ

など、自分にはとても考えられない。
　恋愛ならともかく……と言ってもその相手も見つけられないのだが。

僕は十分ほどで食事を済ませると、空いた容器を流しに置いて、パソコンの前に座った。いつの間にか、帰宅したらメールチェックして、次に真麻さんのサイトを見るのが日課になってしまった。メールは相変わらずジャンクメールばかりで、真麻さんのサイトも更新はされていなかった。ほんの何日か前に会っているのだから、メールが来なくても何の問題も無いのだが、それでも何か連絡が無いかと期待してしまう。

　恋愛とは違うけれど……でも、恋愛の初期の段階と似ていなくもない。
　真麻さんに、下心の有る嫌な男だと思われないようにしなければ。何せ、初めての顧客になる人なんだから。
　僕はデスクに置いてあった真麻さんの本を手に取り、ページを開いた。銅版画の細く黒い線で表現された少女の、どこか冷ややかな眼差しは、作者の真麻さんに似たところが有るなと感じた。
――そう言えば、この本は僕が貰ったものなんだから、これを装幀し直すのは構わないんだよな……。

カラー印刷されたコート紙のカバーを外すと、カバーと同じ絵柄が黒単色でグレーの紙に印刷された表紙が現れる。きれいには出来ているが、勿論それほど凝ったものではなく、背側の両端を飾る花布も付けられていない。
僕は本を持って作業テーブルに移動すると、カッターと定規を取り出し、見返しと遊び紙の際に刃を入れて表紙を切り離した。中の紙は厚手のものを使っているが、ページ数が少ないので厚みは一センチ程度だ。この本を自分なりに装幀してみよう。そして、それを真麻さんに見て貰えれば、彼女も次の本に施したい装幀をイメージしやすくなると思う。

この本を作り直すなら、装幀は内容に合わせてもっと古風なヨーロッパ調でまとめたい。ならば表紙はやはり革だろう。出来ればタイトルは型を作って金押ししたいところだが、型を作るとなると外注しなければならないので、俄にはちょっと難しい。
――そうだ、羊皮紙が有った。
僕はスチール棚の上に置きっぱなしにしていた大判のスケッチブックを取って中を開いた。薄茶色をした使いかけの羊皮紙が一枚、反りも取れた調度良い状態で挟まっていた。
真麻さんの本を上に載せてサイズを確認すると、余裕で一冊分の装幀が出来る大きさがあった。今の羊皮紙は、丁寧に扱えばプリンターも通せるので、さっき外したカバーをプリントして、タイトルだけ金泥か金箔で飾ればかなり華やかになる。

　僕の頭の中で、装幀のデザインが様々に展開して行く。僕は手近に有ったノートを広げると、シャーペンでデザインを書き出した。
結局この晩は、二三のデザインを起こした所で休む事にした。ベッドに入ってからも、僕の頭の中は「海の底の蝶の夢」をどう装幀するかを考え続け、なかなか寝付けなかった。
　それは装幀を始めて久しぶりに感じる、良い物が出来そうだという期待に満ちた幸福な気分でもあった。

　何の変哲も無い日常を生きている上で、こんな多幸感に包まれる瞬間が有る事を、僕は喜ぶべきなのだろう。真麻さんと知り合えた事も、神に感謝すべきなのかもしれない。

僕は数日掛けて装幀のデザインを決め、それに必要な材料を準備した。
真麻さんの作品をコピー、プリントした羊皮紙を使って、角背のハードカバー仕上げにする事に決めたのだ。タイトルは味わいが出るように、後で金泥を使いアウトラインを書き起こす事にした。見返しとその遊びは、タイトルの「海の底の蝶の夢」に合うよう群青色をベースにしたマーブル紙を選んだ。
次の遊び紙は二枚で、厚手のトレーシングペーパーを入れる。そして、そのトレペの隅には彼女の作品の中に出てくる蝶をプリントしたい。
インクの色は、あまり自己主張しないグレーがいい。花布と栞紐は、深紅色が似合うだろう。仕事が終わると急いで帰宅し、食事もそこそこに素材作りに勤しむのは、楽しく充実した毎日だった。

そして週末の土曜日、朝昼兼用の食事を簡単に済ませると、僕は準備万端整った素材を一つにまとめる作業に入った。本の中身が既に有るので、装幀自体はそんなに大変ではない。
中身には遊び紙と見返しを貼り、背は寒冷紗とクラフト紙で補強して花布と栞紐を付けてある。
このままでも、結構綺麗だ。僕は整頓された作業テーブルに、あらかじめカットしておいた芯に使うボール紙と羊皮紙を並べ、慎重に羊皮紙に糊を塗り、縁を折って圧着し形を整えた。

これを正確にきれいに仕上げない事には始まらないのだ。出来上がった表紙で一度本をくるみ、きれい溝を二本つけたらいよいよ合体だ。溝の内側にボンドを塗り、慎重に位置を確認してから本の背に貼り付け、溝に竹串をかませて目玉クリップで止める。

ここまでやれば、ボンドが乾くまで、しばらく休憩だ。一旦作業テーブルから離れ、冷蔵庫からアイスコーヒーのボトルを出してグラスに注いだ。窓の外は、まだ昼だと言うのに薄暗く、雨雲がすごい早さで盛り上がり流れてくるのが見えた。
――これは一雨来そうだな……。
開いた窓から吹きこむ風が湿っぽくなってきたので、僕はグラスを片手に窓を閉め、寝室の窓も閉めようと歩き出した時、厚い黒灰色の雲の向こうが一瞬青白く光り、その数秒後に雷が轟いた。

ポツポツと大きな雨粒が地面に小さな黒い点を穿ち出したと思ったら、突然雨は勢いを増し土砂降りに変わった。僕は慌てて寝室のテラス窓を閉め、食卓テーブルの前に戻ってあまり香りのしない、出来合いのアイスコーヒーを飲んだ。窓ガラスを洗うように流れ落ちる雨の動きを眺めながら、真麻さんの事を考える。

先週の土曜日、あの喫茶店の片隅で聞かされた彼女の顔の怪我の事。自分の顔の傷を辿る、真麻さんの白く細い指。僕の心の中にまでひたひたと侵入してくる、彼女の孤独から染み出す冷たい感触。綺麗なのに気に入らないと言う、彼女の端正な顔。そして、その顔を作った医者のご主人……。

真麻さんの顔を見て何となく感じていた違和感は、事故の後遺症で動きの悪い神経や筋肉のせいだったんだな。そして、何だか人形のように感じるのは、多分彼女の左右対称の顔のせいなのだと気づいた。顔だけに限らないが、大抵の人間は体の左右の造作に、生まれつきや生活上の癖がついているものだ。彼女の顔にはそういうものが無い為、整いすぎている。

ご主人に対しても複雑な気持ちを抱いているようだけれど、それを僕が忖度するのは余計なお世話と言うものだ。

そろそろ、ボンドも乾いた頃だろう。僕はグラスを食卓に残したまま、作業テーブルに戻った。
本を留めていたクリップと竹串を外してボンドの付き具合を確認したら、表紙と本がズレないように溝に沿って紐でくくり、次に見返しを表紙に貼り付ける作業に入る。

見返しに刷毛を使って手早く糊を塗ったら、ゆっくり表紙を倒し表紙と見返しを貼付ける。板に挟んで圧着させてから開いて確認してみると、狂い無くしっかり付いていた。
裏側にも同じ工程を施し、くくった紐はそのままにして立てて乾燥させておく。後は表紙と背表紙のタイトルを金字に飾って完成だが、それは明日でいいだろう。

作業台の上を片付けて窓を見ると、いつの間にか雨は止んで青空が広がっていた。今年の夏は、こんな風に激しい通り雨が降る。ゲリラ豪雨という名前がいつから通り名になったのか良く覚えていないが、まるで東南アジアのスコールのような雨が降るのも、日本の気候が変化しつつある証拠なのだろうか。

僕は軽くストレッチをしようと体を伸ばし、腰を回した。その時、デスクに置いてある固定電話の留守電ランプがチカチカしているのが見えた。
作業中は家の電話も携帯も、留守電にして呼び出し音も鳴らないように設定している為気づかなかったが、誰かがメッセージを残したようだ。留守電のボタンを押すと、一瞬間が空いた後、遠慮がちな女性の声が再生された。

「篠田君、今日は。宮下聡美です。お休みの所済みませんが、この電話か携帯にご連絡頂けないでしょうか」
その後携帯の電話番号を二度言ったので、僕は慌てて手近な紙にメモを取った。メッセージは、ごめんネヨロシク、と続いて終わったが、時間は三十分ほど前だ。
僕は留守電の折り返し発信をしようとしたが、少しためらって受話器を置いた。聡美ちゃんから電話が来るなんて初めての事だ。これは多分、宮下と何かあったんだろう。差し障りない話しで済むとは思えない。

僕はさっき書いたメモを見ながら、宮下の妻の携帯に自分の携帯から電話を掛けた。何回か呼び出した後、おずおずとした声で彼女が応えた。
「……はい」
「あの、篠田と申しますが、宮下聡美さんの携帯電話でしょうか？」
「ああ、私です。ごめんね篠田君、今話しても大丈夫？」
「うん、家から掛けてるから大丈夫」
「ああ、そうなんだ。あ、ちょっと待ってね」
パタパタと足音が聞こえる。家の中で移動したようだ。
「あ、御免なさい。あのね、ちょっと篠田君に聞きたい事があるんだけど……」
「うん」
「あの……河原純さんって、会社の子？」

　僕は彼女の質問にドキリとし、ああ、これは遂に知れてしまったのかと、自分のトラブルでもないのに胃の縮む思いがした。
「そうだね。会社の……えー、営業アシスタントの子だけど……」
「じゃぁ、主人の部下なんだ……」

「そうなるけど、どうして？」
聡美ちゃんが黙りこんでしまったので、もういいよと言おうとした時、彼女が話し出した。
「今日ね、その子が家に来たの。主人に会いに。それで、二人で出て行ってまだ戻らないの」

僕は最悪の展開になってしまった事に驚き、何と言っていいか分からなかった。
「あの子、凄い目で私のこと睨んでた。笑っちゃうわよね、盗っ人猛々しいとは良く言ったものだわ」
「いや……まだ、そういう事だとは」
「ううん。そういう事なんでしょ？　いいのよ、分ってる。浮気はこれが初めてじゃないし……別れ話で揉めてるんじゃない？」
「そうなのか……。困った奴だな」
僕は意外と落ち着いている聡美ちゃんに安心したが、同時に彼女の中に一種の覚悟のようなものを感じて怖くもあった。

「河原さんは奔放なタイプなんだよ。今は頭に血が上っているのかもしれないけど、きっとすぐ飽きるから……。宮下だって、君達家族の方を大事に思ってるはずだよ」
「思ってるだけじゃダメなのよ」
「確かにそうだね……。宮下の携帯に掛けてみた？」
「うん、出ないけどね」
「そう……僕が掛けてみようか？」
「いえ、いいわ。あの人、変にプライド高いし、篠田君には対抗意識持ってるから」
「僕に、あいつが？」
「肩書きとかね……。ふふ、馬鹿でしょ？」
確かに肩書きは僕が係長で宮下は主任だけれど、これは部署による人数的な問題で、収入面などでは殆ど差がない。豪放に見える宮下が、そんな事を気にしていたとは意外だった。

「僕が営業部にいたら、万年平社員だよ」
「変わんないわよね、篠田君は……」
　聡美ちゃんの言葉が細くなり、震えて消えた。
「大丈夫だよ、聡美ちゃん。大丈夫だから……宮下が戻って来たら、一発引っぱたいてやれよ」
「……そうだね……そうす……」
「あんまり帰りが遅いようなら、もう一度電話して。僕、様子見に家まで行くから」
「わかった、ありがと……じゃぁ」
「じゃぁね」

電話が切れ、僕も受話器を置いた。聡美ちゃんの涙声がしばらく耳を離れなかった。夏もそろそろ終わりだと言うのに、午後の日差しは勢いを増し、一とき雨で黒く濡れた道を見る見るうちに乾かして行く。
こんないい天気に子供達とも遊ばず、宮下の奴は何処に行っているのだろう……。僕は振り返って、作業台の上で乾燥を待っている本を眺めた。
――何だか今日はもうやる気がしない……。

本をそのままに、僕は溜まっていた洗濯や掃除をして気持ちを切り替え、その後は新聞を読んだりネットを見たりして時間を過ごした。
聡美ちゃんの事が頭の隅に引っかかり集中できず、絶えず電話を気にしていたのだが、結局その日はもう電話が鳴る事は無かった。

宮下は多分家に戻ったのだろう。その後、夫婦でどんな話し合いをしたかは気になるところだが、あちらから話してくれるならともかく、僕から様子を伺うのははばかられる。
週明け、宮下と河原さんが、ちゃんと出社してくれれば良いがと思いながら、僕は日付が変わる頃にベッドに入った。

日曜日、朝起きてから昨日装幀した本を確認すると、綺麗に乾いていて、なかなか良い仕上がりだった。念の為、反りが出ないように木の板に挟んで重しを掛けてから朝食を作る。
ちゃんとした料理は面倒なので、トーストにコーヒー、ソーセージを炒めて目玉焼きを添えるだけの簡単なものだ。ラジオを聞きながら食事をしつつ、今日はどうしようかと考える。

真麻さんの本のタイトルを金字で飾って、せっかくだから、あの本に合う函を作ろうか？　確か、以前装幀に使ったウィリアム・モリスの植物柄の布が残っているはずなので、あれなら羊皮紙の上品だけれど若干地味な色合いに花を添えてくれるだろう。僕はコーヒーを飲み終わるとすぐ食器を台所の流しに片付け、手を洗って作業台に向かった。

金泥や筆を用意しながら、電話を留守電に切り替えようかと思ったが、やはりまだ宮下の家が心配なので着信音量を下げるだけにしておいた。筆を使う時は特に息を詰めて作業する事が多いので、電話は切っておきたいのだが、仕方ない。

本のタイトル「海の底の蝶の夢」は、活字ではなく手描きのレタリングを印刷したもので、多分、真麻さんが自分でデザインしたものだろう。定規で引いた線ではなく、手書きの若干ぶれた線が、繊細さと脆さを表現していて味わいが有った。
僕は、何度か紙の上で筆使いを練習した後、その端麗な飾り文字のアウトラインだけ、少し青みがかった金の絵の具を乗せるように細くなぞった。息を止めて線を引き、一画書くごとに息を吐いた。

――これは意外に大変な作業だ……。
少々後悔したが、始めてしまった以上後には引けない。二時間ほどかかって、表紙と背表紙のタイトルを飾り終わった時にはすっかり疲れて、僕は眼鏡を外して眉間の辺りを指で揉みほぐした。
クラクラする。函に取り掛かる前に、一旦休憩しよう。

僕は台所へ行き、朝に落としたコーヒーの残りをマグカップに注ぎ、立ったまま口をつけた。今日中には函も作れるだろうから、本と一緒に写真を撮って画像を真麻さんに送ってやろう。現物を見せて上げられればいいけれど、彼女も結婚しているんだから、ご主人の知らない男としょっちゅう会うわけにはいかないだろう。

彼女のご主人は、どういう人なんだろうな。病院で知りあい、そこで恋をして結婚したんだろうか？　良く考えてみると、僕と真麻さんは、本やアートの話は沢山したが、それぞれの個人的な事はあまり話していない。まぁ、お互いあんまり深く知り合わない方が身の為かもな。宮下のようなトラブルは引き起こしたくない……。

僕はぬるくなったコーヒーを飲みながら、窓の外を眺めた。今日は朝からいい天気だ。昨日は一歩も外へ出なかったけれど、今日は夕方になったらスーパーでも行くか。
僕は飲み終わったマグカップを流しに置くと、函を作る為に作業台へ戻った。

夢想

「真麻、まあさ」
夫の呼ぶ声にハッとして、洗濯物を畳んでいた手を止め顔を上げると、夫がちょっとムッとした顔で私を見下ろしていた。

「あ、ごめんなさい、呼んでた？」
「呼んだよ、何回も」
「ちょっとぼうっとしてた」
「まだ、調子悪いの？」
「ううん、もう大丈夫だけど、考え事してたから。何？」
夫は私の座っているソファに、洗濯物を挟んで腰を下ろした。
「来月になったら、二三日休みを取れそうなんだけど、久しぶりに何処か行かないか？」
「そう……」

旅行は行きたいが、私はどうせ行くなら美術館巡りでもしたいのだけれど、夫は良いホテルと美食と買い物を楽しむのが目的のタイプだ。この二年の間に、新婚旅行を含めて何度か旅行をしたものの、私が彼に合わせる事になるので、楽しくないわけではないが、さほど充実した旅ではなかった。夫には悪いが、二三日一人旅をさせてくれればいいのにとさえ思ってしまう。

「まぁ、あんまり遠くには行けないから、温泉でも行こう。いい部屋が取れそうなんだ」
「そうなの。任せるわ」
夫がこう言う話をする時、もう既に段取りは組まれている。頭の回転が早く世慣れた彼は、細々と私に相談して時間を無駄にしたりしない。私も自分の希望を言ったところで、上手く彼の希望通りに事が進むように何気なく説得されるのに慣れてしまい、もうこう言ったプランに口を出すのを止めた。彼に対抗するには、彼の元妻のような経済力と自律が必要なんだと思う。

私に任せると言われた彼は、上機嫌でサイドテーブルに置いた経済誌に手を伸ばし読み始めた。私は彼と結婚した事で沢山のものを得たが、また沢山のものを諦めてしまった。唯一諦めていないのが、銅版画だ。私が夫の呼びかけに上の空だったのは、この銅版画の事と、昔の恋人の浩平の事を考えていたからだった。先週届いた浩平からのメールに、私はまだ返事を書いていない。どんな返事を書けばいいのか、まだ気持ちが決まらないのだ。何年も前の事だし、私は今幸せだから、もう気にしなくていいのよ、とやんわり彼を遠ざけるべきか、それとも、あなたのような酷い人間とは二度と関わり合いになりたくない、と残酷に切り捨ててやるべきか？

もう一つ、彼の希望通り一度会ってこの顔を見せ、お互いの問題に対峙するという選択もある。多分、一番誠実なのは三番目の選択だと思うけれど、彼と待ち合わせする自分を想像するだけで、胃が縮み吐きそうだ。私は彼の事をもう好きじゃない。でも、彼は時折私の夢に現れ、以前のように楽しく気ままに私を引っ張り回し、不意に何処かへ行ってしまう。私は、ああ、やっぱりねと淋しい想いを抱いて独り佇み目が覚めるのだ。

彼はいずれにしても私に寄り添ってくれる人ではないと、そう夢から醒めて思うのが常だった。あの人は私の事、どう思っているのだろう。五年もあれば、新しい彼女を作ったり、私のように結婚しているかもしれない。子供が二人くらいいても不思議ではないほどの時間が流れている。もしかすると彼は、私が思っているような拘りは持っておらず、本当に事故とその後の不実さを謝りたいだけなのかもしれない。
今でも誰かにタトゥーを彫っているのかしら。絵を描くのは止めてしまったのだろうか……。

私はソファに体を預け、宙空を見つめた。空想のビジョンが目の前に現れる。私の目ではなく脳がイメージを視始めたのだ。
彼が雪のように白い女の背中一面に、幻想的な花の群を彫っていた。それは静かで落ち着いた色調の、まるで屏風などに描かれる日本画のような美しさだった。
私は全裸の女の肢体に隙間なく描かれた、春夏秋冬様々な種類の花の美しさに幻惑され、陶然とした。

――なんて綺麗な……。
私は浩平に、もう未練は無い。だけれども、彼の緻密で妖艶な画風には今でも憧れているのだ。ふーっとため息を吐くと、不審そうに私の横顔を見ている夫の視線に気が付いた。
畳み終わった洗濯物を抱えて立ち上がり、コーヒーでも淹れますかと聞いてみると、夫は無言で頷いた。洗濯物を寝室に片付け、キッチンのコーヒーメーカーに水と粉をセットし、自分用に置いてある椅子に腰掛けた。

もう少し考えよう……もう少し考えて、彼と会っても動揺しない自信がついてから返事を書こう。私は、彼と会うことを前提として考えている自分にハッとし、一人キッチンで項垂れた。彼と会うのは、やはり怖い。彼の事はもう好きではなくても、会うことによって、あの当時の絶望的な気分を思い出すのに耐えられそうにないのだ。

日曜日の夜、パソコンのメールチェックをしたところ、篠田さんからメールが届いていた。何だろうと開いてみると、私が上げた本に羊皮紙で装幀をしてみたので見て下さいと簡単な説明があり、装幀された表紙、背表紙、開いた時の見返しと遊び紙の様子、そして函の画像が添付されていた。
「わぁ、すごい！」
私は思わず声を上げた。

あの素っ気ないコート紙の表紙でくるまれただけの本が、優しいベージュ色の革に包まれている。その表面には私の版画の一枚が上手くデザインされ、黒の単色で刷られていた。
タイトルは金の絵の具で装飾を施され、まるで別の本だ。見返しと遊び紙の選択も、余計な甘みがなく私好みだし、函に使われた柄はウィリアム・モリスだろうか？　奇を衒ったものではないが、全体にとてもシックな仕上がりだった。
「ああ、素敵だわ……。触ってみたいなぁ」

私は送られてきた画像を、自分の画像フォルダに保存し、拡大して何度も眺めた。これから作る自分の本の装幀は、何となく革がいいと考えていたが、こういう自然な色もいいな、と思った。
今度篠田さんに会う時、是非ともこの本を見せて貰おう。篠田さんとは、まだ二回しか会っていないのに、まるで幼馴染みか親戚の男性と話すみたいに自然でいられる。こんな事を言ったら、篠田さんは不愉快かもしれないけれど。

早速、篠田さんに返事を送る事にした。装幀の感想と、次回お会いする時に仕上がった本に触らせて欲しい旨を書いて送信すると、私の気持ちは数日ぶりに明るくなったと思う。

――いい本を創りたい。
私の創作に対する情熱が、またふつふつと沸き上がってきた。この欲求と、ある思いが私の中で結びつき、勇気となって私の心を決めさせた。

浩平に会おう。
彼の謝罪や懺悔を受ける為ではない。勿論、自分の鬱憤晴らしや気休めの為でもない。
私が、より良い作品を作る為に、彼に会って話しをしたいと思った。
会うことを承諾するメールは、感情的な事は一切抜きの、ビジネスライクな書き方にした。日曜日以外の日中なら二三時間は時間が取れるので、都合の良い日時を指定して欲しい。それだけ。

私が会いたいのは、アーティストとしての谷崎浩平だ。もし彼が今、何も描かず何も創っていないのなら、私は彼に用は無い。その時は、完全に縁を切るつもりでいる。
私はざっと書き上げたメールをチェックすると、送信ボタンを押した。

翌日の夜メールチェックをすると、既に浩平からの返事が届いていた。
提案されたのは、今週木曜日の午前十一時、ある老舗のカフェでの待ち合わせだった。そこは、昔よく二人で出掛け、長い時間を過ごした思い出の場所だ。

でも、私は今、過去の思い出に浸りたい気分ではない。私は、すぐに了解した旨の返事を書き、メールを送信した。

私家版‐上巻

この作品は２０１１年７月２日から２０１１年１１月２０日まで
ブログ「白嘘物語」に連載していた作品を、上中下、三巻にまとめたものの、上巻です。
物語の中盤となる中巻、完結編となる下巻もお読み頂ければ幸いに存じます。

著者：葉山ユタ

尚、ブログは２０１１年１２月より、別のアドレスに移行しております。
こちらも併せてよろしくお願い致します。
「白嘘物語‐つくも嘘物語」

２０１１年１２月２３日

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/41306

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/41306